COBALT-SERIES

緑玉の枷に繋がれ

天の花嫁

前田珠子

集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

緑玉の枷に繋がれ

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

緑玉の枷に繋がれ

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　緑玉の枷に繋がれ
緑玉の枷に繋がれ……7
あとがき……189



ガスカール

ナルレイシアの護衛を命じられた青年公爵。クールな性格で、ことナルレイシアに対して手厳しく、口を開けば毒舌ばかり。

ナルレイシア

「不幸中の幸いの権化」というありがたくない異名を持つ本好き少女。柱神さまを見きわめる「選定者」でもある！

物紹介



スカルトード

超絶美形の青年にして、とある杜神さまの縁者でもある。ナルレイシアとは「本の虫同盟」の絆で固く結ばれている。

ウォルセン

良家の子息だが、理由あって家出中。手先の器用さを活かしてなんとか生計を立てている。女装で追っ手をまいているが…？

登場人

イラスト／明咲トウル

緑玉（りょくぎょく）の枷（かせ）に繋（つな）がれ

不思議な小鳥の存在を知ったのは八歳のときのことだった。
生来頑健とは言い難い体に生まれついた彼は、その日の夜も些細なことが原因で熱を出した体を抱きしめ、苦しんでいた。
最早、それは日常のことだった。
季節の変わり目で少し冷えたから——あるいは逆に暑かったから。
そんなことで、たやすく彼の体は変調を来す。
周囲の労りも同情も、調子を崩した彼にとっては何の意味も持ちはしない。
『苦しいの？』
意味のない問いだ。
『おいたわしい』
同情など、なんの役にも立たない。
『お気を確かに』
気などいつだってしっかり持っている。

『大丈夫です、大丈夫です、大丈夫です！』

なにを指して大丈夫だというのか。

この、身を引きちぎられるような痛みを知りもせぬ他者の言葉など到底受け入れることはできなかった。

『大丈夫ですから、頑張ってください！』

頑張れなどと……よくも気安く言ってくれる。

生まれながらに脆弱な肉体を与えられ、何度もそのせいで生死の境を彷徨う目に遭ってきた……その都度、必死に死の誘いから逃れるために、どれほど自分が頑張ってきたと思っているのか。

頑張ったのだ。

限界まで頑張って、いまの自分がいるのだ。

なのに、これ以上どう頑張れというのか。

「勝手なことを言うな」

かなうことなら、そう大声でわめき散らしたいぐらいだった。

だが、そんな醜態を晒すことなど、彼の矜持が許さなかった。

だから、彼は常に笑顔で応じ続けてきたのだ。

『ありがとう』
と。
『頑張るよ』
と。
その限界が近いと感じていたある夜に、彼はその不思議な小鳥の声を……歌声を、耳にしたのだ。
それはどこまでも透明な歌声だった。
荒れ、ささくれだった心が即座に癒され、産毛で優しく撫でられ慰撫されるような……言葉では表現できない感覚を誘う声だった。
優しい……無条件の慰撫の声。
欲しい、と即座に思った。
この歌声を持つ主が欲しい、と——否、必要だと。
自分がこれから生きていく上で、この歌声は必須だと。
確信したから、一所懸命彼はその存在を捜し、求めた。
幸い、件の小鳥は完全なる秘密裏に運ばれてきたわけではなかった。
だから——その後のことは簡単なことだったのだ……興味を惹かれた小鳥のことを調べるな

どということは。

ただ、自分のことを思うあまり、近くに仕えていた者たちが、期待したほど迅速には動いてくれなかったのは誤算といえば誤算だった。

ようやく居場所を突き止め、会いに行った時――。

すでに求めた小鳥は死にかけていた。

眼差しだけを自分に向けてきたその小鳥は、すでに自力では指一本持ち上げることもできないほどに衰弱していた。

生まれて初めて、欲しいと思ったものを見つけたというのに……その命は尽きようとしていた。

そうと知ったとき、胸に湧き上がってきたのは強烈な怒りだった。

死なせるものか――と、心に決めた。小鳥が死にたがっていようが、知ったことではなかった。

彼には、小鳥が必要だった。

小鳥自身がなにを思おうと、小鳥には生きていて……そうして、そばにいてもらわなければならないと、自分で決めた。

小鳥がいらないというのなら、その命――存在ごと、自分が貰うとそう決めた。

1

マルシアス家の養子であるウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアスと共に、彼の義母が隠棲している山荘の村を訪れる途中――。

突然の襲撃に遭った際、（塡められた！）とリーイン・ル・ファンが感じた――否、確信したのには理由があった。

それは、現在マルシアス家を束ねている褐色の髪の青年が、質としていたリーイン自身の髪を返却した際に、交わされた会話によるものだ。

結界術師に限らず、精霊や自然に関わる力を持つ者たちにとって、その息吹や気配を色濃く宿す徴や名残は最大の弱点となり得る代物だった。

同じとは言えずとも、似たようなことに通じた者は、それらを使い、たやすくこちらの気配を読み解く術を持つからだ。

霊力が最も集まる髪と、命の源である血は、その手がかりとして最たるものだった。

だから……その危険性故に、髪の一房を切り取られ、質とされた時、敢えて逆らうではなく従うことを選んだ。

目的を果たしさえすれば……つまり、その要望を叶えさえすれば、相手はあっさりと質となった髪を返してくれるだろう……気質的にそうした人間だと判断したからである。

事実、その直感は間違ってはいなかった。

マルシアス家の現当主は、家出中にあるその義弟を無事に保護したリーインに、正当な報酬を渡すと同時に、脅すための品――リーイン自身の髪の一房をあっさり返してきた。

だから、リーインとしてはそこでマルシアス家との縁は切り、以前同様の気ままな放浪生活に戻るつもりであったのだ……が。

ざわり、と全身の産毛が逆立つような違和感と共に、最早それが遅きに失する決断であったことを知る。

逃げる……べきだった。

危険だと……否、危険かもしれないと危惧を抱いたその瞬間にでも。

脳裏に、少しばかり過去の記憶が甦った。

「リーイン・ル・ファン。貴方にお尋ねしたいことがあります……貴方はもしや、追っ手持ちではありませんか？」

返答に困る問いを投げかけてくれた、褐色の髪の青年を前に、リーイン・ル・ファンは平静さを保つのに必死だった。

それは決して気取られていいことではなく、また確信させるわけにはいかぬことだった。

……そう、もし気取られたが最後、その命を奪う覚悟を強いられる程度には。

それは、まずありえぬことのはずだった。そのための努力を、リーインはこれまで惜しむことなく払ってきた。

だのに――この身を包む、この空気はなんとしたものか。

「……なぜ、そのようなことを？」

尋ねられるのです？

言外の問いには、抑えきれぬ殺意が宿っていたように思う。

祖国からの追っ手の気配は、言葉だけでもリーインの神経をささくれ立たせた。

死した方がまだしも楽かと思うほどにきつい想いを、彼はこれまで何度となく『彼ら』によって味わわされてきたのだ。

素直に答える気になどなれない——だが、「彼」の問い方はごくごく自然なものだった。単なる事実を確かめる——それだけのために放たれた問いに思えて。

だから、常であれば絶対に返さぬ言葉で、リーインは応じたのだ。

それは、半ば以上相手の疑問を肯定する態度だとわかってはいた。そこで譲歩することが、こちらの不利に働くことも。

それでも、だ。

リーインは訊かずにはおれなかった。

なぜなら、相対する青年の背後に、自分が気をつけなければならない影とでも呼ぶべきものの気配を感じ取ってしまったからだ。

「なぜ、そのように感じられました？」

さらに問いを重ねたリーインに、相手は一定の満足を得たのか、焦らすような真似はせず——印象からして、いかにもやりそうな相手だと思っていたのだが——ふう、と小さく息を洩らした。

「簡単なことです……強引に預かったあなたの質を追っていたわたしの占者が見いだしたのですよ……それも、ずっと古く、強い絆を辿ろうとする強い気配を」

ああ、本物だ——と、そのとき思った。

リーイン・ル・ファンは東方社会に生まれた術者であり、言霊の支配をことさら気にするよう教えられてきた人物だった。

そんな彼にとって、言葉の力を軽視し、時にもてあそぶ真似までする西方社会というものは、正直信じがたいものだった。

馴染むのに何年もかかったのは、偏にその認識の差異ゆえだったといってもいいほどだ。

故郷に比べるべくもなく言霊をないがしろにしている世界――その存在を知りながら、敢えて無視しているとしか思えないこの世界――。

そんな場所で、どうして世界を支える御柱や、それを見極める『選の巫女』以外に、純粋に気配や空気を読み取れる者がいるなどと思えよう――？

だが、それは自分の思い違いだったのだ。

これほどに歪み捻れた世界にあっても、真実を見抜く者はいるのだと――もしかしたら、天からそれを求められているのかもしれないが――リーインは理解した。

しかし、その後に続けられた言葉は、全く以ていただけなかった。

「彼女によると、気配はどんどん近づきつつあるという話です……このアシャスに向かって。しかもその動きには迷いがないと……」

それは、自分がこの地にあることを、相手が確信しているということだ。

ひやりとするものを感じた。
目の前の青年を相手に認めるかどうかはまだ決めかねてはいるが、確かに自分は遠い祖国から追われる身である。
理由は至極単純なものだが、だからこそ向こうが諦めないだろうことはわかっている。
（来たのか……）
それは、あまり意外なことではなかった。
いつかは見つけられると覚悟していたからだ。
しかし――。
（迷いがない……？）
それはつまり、相手は自分がこの地に――アシャスに在ると確信していると言うことだ。
何を以て、その確信を相手に与えたというのか……それが気にかかる。
しかし、そんなことをわざわざ目の前の、油断ならない青年に教えてやる義理はない。
さも億劫といった顔で、リーインは息をついて見せた。
「やれやれ。あちらさんも執念深いこって……」
軽い口調で誤魔化されてはくれないだろうとは思ったが、全く期待しなかったといえば嘘になるから、続いたアシュアイードの台詞には内心でため息をついた。

「お心当たりがおありで？」

確信しているだろうに、わざわざこちらに言質を求めてくるあたりがタチが悪い――いや、それさえも挨拶代わりの探りに過ぎないあたりが、真のタチの悪さだろうか。

だが、素直に答えてやるつもりもないリーインは、呆れたように肩をすくめて答えたのだ――双方茶番だと認識していても、舞台は崩されないことによって何らかの意味を持つ。

要は、舞台を壊さないことが、この場では肝要なのだ。

「さてね、仕事柄、恨みを買うことも少なくないからなぁ……その内の誰かが、やはりおれに恨みを抱いてる同業者を抱え込んだって線は消せないというか、実にあり得ると言うか……」

暗に『追っ手』の種類を限定するような言葉を選んだリーインに、しかしアシュアイードはそれ以上追及するようなことはせず、ただ「大変ですね」と曖昧な言葉で応じた。

そこで話は一区切りついたはずだった。

少なくとも、そうリーインは思ったものだ。

しかし、静謐な湖面を思わせる色をたたえた瞳の青年は、そんな彼の思いをくみ取ったかのような態度を見せながら、決して無関係ではない話を持ち出してきた。

「それはそうと、わたしはしばらく、義弟を母の山荘に隠そうと思っているのです」

ああ、そうかい、勝手にしてくれ――とは、偽らざるリーインの本音だった。

半ば脅されて請け負った仕事だ。件の青年を保護し、依頼主である目の前の青年の元に連れて来、質とされていた髪も取り戻した。

これ以上、関係を深めるつもりなどなかった。

祖国からの追っ手が迫っていると知らされれば尚更だ。

（さて、どこに身を潜めるか……）

すでにリーインの意識はその一点に集中していた。

最も安全な場所があるにはあるが、気配の欠片でも摑まれてしまっているかもしれない今の状況では、そこに逃げ込むわけにはいかない。

万が一にも、その場所――その存在を、向こうに気取られるわけにはいかないのだから。

だとしたら、多少の苦労は覚悟の上で、完全とは言い切れぬが、それなりに安全な場所に向かうべきか……だが、貴重な安息の地を知られるのはあまり嬉しくはない。

となると相手をまくしかないのだが……その力量を知らぬままでは、確実な手だては立てられない。しかし、それを知るために、敢えて接触するなど愚の骨頂というもので……本当に、どうしたものかと、らしくもなくリーインは迷った。

こうした場合、いつもであれば天啓にも似た答えが降ってくると言うのに、今回に限ってはそれがないのだ。

そういう場合は、これまでの経験からすると、自力で切り抜けられる程度のものだということだが……今回だけは、なぜか心が騒いだ。

だから、翡翠の瞳の青年が持ち出した提案を、心に留めてしまったのだ。

「保護した貴方なら、すでにお気づきだとは思いますが……義弟は、ある事情によって、複数の勢力に狙われてます」

その言葉に、リーインは敢えて答えを返さなかった。

言われるまでもなく、そんなことはわかってたからだ。エアランの街でかの人物を見いだした時、すでに彼に絡まりついた気配は読み取っていた。

正に妄執と呼ぶにふさわしい想い、煮えたぎる殺意、純粋な好意、すでに好意だけとは呼べぬであろう強く育ちすぎた執着――あの榛の瞳の青年には、自覚はないのだろうが、いくつもの想いの蔦が絡まりついていた。

負には堕ちていないとはいえ、そのなかには目前の青年のこだわりも含まれていた。

この家――マルシアス家の事情はさほど詳しくはないが、多少は通じている。だから、かの青年に向けられるさまざまな感情や執着は納得できるものがあり、だからリーインは「あー、確かにそのようで」と返したわけだが……これが、まずかった。

リーインの気のない返事を勝手に同意と受け取ったらしい翡翠の青年が、さらにとんでもな

いことを言い出してきたのである。
「やはり、貴方もそう思うでしょう？　つきましては、貴方には引き続き、彼のことを護ってはいただけないかと、わたしは思っているのですが……」
続けられた言葉のあまりにあまりな内容に、リーインは顎が落ちるかと思った。
「はあ!?」
意外などという言葉では片付けられないものを覚えた。
正気か、と尋ねそうになったほどだ。
しかし、腐っても大領主の跡継ぎというべきか――アシュアイードはにこやかに恐ろしい言葉を繰り出してくれたのである。
「わたしは彼を護りたい……だが、彼を損なう意図を持つ者たちは雲霞の如く湧き出でる……そろそろ、打ち止めとしたいのですよ。もういい加減、あいつの周囲を飛び回る羽虫は片付けてしまいたい……その羽虫の近くに、あなたを狙う輩がくっついているのであれば、一網打尽にしたところで、なんら問題はありません」
慈しみに満ちた言葉を発しながら、アシュアイードの表情はどこまでも恐ろしい、危険なものを内包したものだった。
だから。

その時、気づきはしたのだ――アシュアイードの言葉に頷くことは、同時に大いなる危険をも抱え込むことを意味すると。

わかっていたつもりだった――。

けれどそれが、あくまで『つもり』にすぎなかったのだと思い知らされて、面白いはずがない。

(嵌められた！)

畜生、とリーインは内心大いに憤った。

だが、そんなことは今更というものだった。

追っ手の気配は近い。

ざわざわと心が波打つ。

囮、とされたのだ。

あれほどに慈しんでいる風を装いながら！

あの翡翠の当主は自らを危うくする存在を浮き彫りにするために、『何より大切』だと言っていた義弟で親友である者すらも、こうして危険に放り込むのだ。

殺意が迫る。

考えたのは数瞬――。

後は、体が動いていた――。

2

（なんだ？）

そう思ったのは、耳元を切る風の音を認めた瞬間のことだったと思う。

ぴぃぃん――と。

音にならぬ音を耳に届けて、一本の矢が自らの首のすぐ側――否（いな）、馬車の同乗者である男に強引に押し倒されなければ、首そのものにつきたてられていたに違いないそれを見つめながら、ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアスはただ呆然（ぼうぜん）としていた。

（いったい、なにが……？）

起こったというのか？

本来ならば、考えるまでもない簡単なことだった。

……襲われたのだ。

自分がマルシアス家にとって不必要な騒ぎを起こしかねない要因であることを、ウォルセン

は知っていた。

かつて――マルシアスの一族が、マーシャスと名乗っていた時代。

故郷を追われて放浪していた時代、一族に希望をもたらした女神ファタランテの『子供たち』と称された、彼女の額にあったものと同じ『徴』を持って生まれ落ちた自分――。

望むと望まざるとにかかわらず、自分が『聖印の子供』である事実は消えない。

一族に伝えられる、『約束の地に導く子供』であることに――。

かつてマーシャス一族は、女神ファタランテの死後、ふたりの『聖印の子供』を得たのだと言う。

ひとりめの子供は、女神の没後四半世紀少しを経て誕生した。

未だ安住の地を持たぬまま彷徨い続ける一族に、移ろうことなき第二の故郷を与えたのはこの人物だったという。

パースアルという、当時大国からの侵略の危機に晒されていた小国に、自分たち一族の戦力を売ることで、一族は放浪の日々から解放されたのだ――。

そうしてマーシャス一族は安住の地を手に入れた――常に他国の脅威と戦い続け、パースアルの国土を護ることによって。

第二の『聖印の子供』が生まれたのはそれから約八十年後のこと。

手にしたマーシャスの武力のあまりの大きさゆえに、短期間の内に膨れあがった国土に対応しきれないまま、パースアルの中枢は腐敗の極みの状況に陥っていた。

ふたりめの『聖印の子供』が、マーシャス一族に生まれたのは、まさにそんなころのことだった。

マーシャス一族の武勲によって領土を拡大し続けるパースアルの中枢にある者たちはしかし、膨れあがる利権に意識を捕らわれ、国政にではなく、自らの私腹を肥やすことにこそ夢中になっていったのだという。

そんなパースアルの姿に、絶望とまではいかずとも、明らかに失望を感じたであろう当時のマーシャスの当主にして、二人目の『聖印の子供』である人物は、当時パースアルにとって最大の脅威であるディエーンの王家に連なる将軍と、戦場で相まみえ、ふとした偶然から三日ほどをふたりきりで過ごすという稀有なる時間を得た。

奇跡の三日間――後にそう呼ばれるその間に、両者がなにを感じたのかは伝えられてはいない。

だが、確かにそれは『運命』と呼ぶにふさわしい絆を両者の間に培うための時間であったのだろう。

かくして、パースアル最大戦力であるマーシャス一族は、当時は一将軍に過ぎなかったディ

エーン王族のひとりに跪いたのである。
その事実ゆえに、パースアルは事実上崩壊し、ディエーンは無二の戦力を手に入れた。
王家が交代したことにより、その忠誠の在処はたゆたうこととなったが、それでもディエーンにおけるマーシャス――否、ディエーン風に改姓し、誕生したマルシアス侯爵家の権威と力は南部最大の勢力として揺るぎないものを誇っている。
そうして……第三の『聖印の子供』として生まれたのがウォルセンだった。
前のふたりと違い、本家からは遠く離れた傍流に――緋色の痣だけを証として。
違いすぎる条件の下、望まれぬ時代と環境の下に、それでもウォルセンは生まれ落ちてしまったのだ。
心臓が凍り付く。
先ほど受けた矢の攻撃は、紛れもなく殺意を孕み、この命を奪うべく放たれたものだった――そう確信できるからこそ、ウォルセンの衝撃は大きい。
襲撃の目的は奈辺にある……？
自分に殺意を覚える派閥には心当たりがある。
アシュアイードの婚約者であるラルクティア家の勢力である。
ウォルセンが『聖印の子供』であることが知れた時、マルシアス侯爵たるエルセイドにその

存在の処分を真っ先に訴えたのがかの一族だと言うことを、悲しいことながら、ウォルセンはとうの昔に知っていた。

だが、エルセイドは彼を本家に引き取り、見張りつつも処分の手を下すことはせず……。

ラルクティアにとっては最悪なことに、彼らが旗頭と見なしていたアシュアイードは、よりにもよってそんな自分を気に入り、手元に置くことを選んだ。

彼らがどれほどに悔しい思いを噛みしめたことか——想像に難くない。

それに似た激情を、自分を——望みもしないのに——擁しようとする勢力のひとりが吐き出すのを、ウォルセンは過去に目にしたことがあるからこそ、わかる。

『あのような出来損ないが……』

いくら止めろと言っても、どれだけ自分がアシュアイードを大切に思っているかを訴えても、その人物は呪詛にも似た言葉を止めることはなかった。

『たかが本家に生まれ落ちたというだけの……』

『奇跡の力も持ち合わさぬ脆弱な子供のくせに……』

『我らが至高の主を——』

『下に扱おうなどとは……不遜にもほどがある』

毒々しい言葉を吐き出す彼らに、どれほど絶望したことか——。

いかに言葉を尽くして、アシュアイードの類稀な資質を訴えかけたところで、耳を貸そうともしなかった彼らに、自分がどんなに失望したか――。

きっと、彼らは未だにわかっていないだろう。

自分にとって、大切な存在であるアシュアイードのことを貶める言葉を口にする――それがすでに自分を傷つける行為なのだと――。

精霊と通じ合う異能と、言い伝えの緋色の痣を持つ――それだけで、彼らは自分を『女神の子』と見なし、人間とは一線を画した存在として扱い、そうしない他者を蛇蝎の如く忌み嫌ったのだ。

そうして、ついには現実的にアシュアイードを排除すべく動き出した。

それを黙って見過ごすラルクティア家ではなく、後見を担う両家は、いつしか相手の御輿を落とすことに夢中になった……。

マルシアス家の総領であるエルセイドの目を掠めながら、幾度となく自分もアシュアイードも、互いを庇護するふたつの勢力に命を狙われた。

実のところ、ウォルセンは自分を立てると主張するアタラクシア家に対して、欠片も好意は抱いていなかった。もっとはっきり言うなら、「余計な世話だ、放っておいてくれ」というのが本音だった。

そんなアタラクシア家が、「自分のために」などと主張して、アシュアイードの命を狙うなどあってはならないことだった。

だから……本当は、ずっとそばにいたかったアシュアイードから離れることを選んだのだ。

一番簡単で後腐れのない始末の付け方――自殺――は、彼本人から止められていたから。

それはもう、言われた方としては最悪としか感じられない言葉で。

『覚えておいてね、ディー。これから……この先、お前が怪我したら――寸分変わらぬ傷を、僕はこの身に負うからね。指を針で突いたら、同じ刺し傷を。転んで擦り傷を負ったら、同じ箇所に擦り傷をつくる。斬られたりしたら、やっぱり同じ場所に同じ深さで――』

そう告げたアシュアイードは、ウォルセンが半信半疑であると見て取るや否や――実際のところは、呆然としてなんら反応できずにいただけのことだったのだが――実際に、自分が負った最近の怪我を躊躇いなく再現しようとしたのだ。

すなわち、『聖印』たる痣を焼き潰すべく、燃えさかる薪を左の二の腕に押しつけたのと同じことを――。

ぞっとした。

あの時ほど心が震撼したことはないと言い切れる。

アシュアイードは本気だった。本気で自らの左腕に意味のない大やけどを負うつもりだっ

た。

心底怯えるという感覚を、自分はあの時知ったのだと思う。

だから――自殺はできない。

アシュアイードは必ず口にしたことを実行するに違いないのだから。

では？

どうしたらいい？

自分を殺さず、アシュアイードを殺させず、共に『生きて』いられるためには――？

（あの頃は……）

あの頃に見いだした答えは、『身を隠す』……それだけだった。

死ぬわけにはいかない。けれど、あげるべき御輿がそれを拒絶し、姿を隠せば、アタラクシア家の面々も諦めるだろうと思ったのだ。

そうして、それと対応して、ラルクティア家も躍起になって自分を抹殺する必要はないのだと認識してくれると……。

そう思ったからこそ、全身全霊の力を尽くして、この身を隠したのだけれど――。

策は、破れた。

自分は実質上のマルシアス家当主となったアシュアイードによって見つけ出され、連れ戻さ

れてしまった。

ただし、それはあくまで秘密裏に行われたことのはずだ。

そんな自分を襲える存在など、ひとつしかないではないか――。

（やっぱり、ラルクティア家が……）

脳裏に浮かぶのは、かの家の当主とその娘の顔だ。

ザイオン・トレニア・オルス・ラルクティアと、ファンディア・アクティス・オルス・ラルクティア――聖印を理由にマルシアス家に引き取られたウォルセンを『偽者』扱いする一族が殆どを占めていたころ、そうした偏見を持つことなく、好意的とまではいかないまでもきちんと本家の養子として対してくれた数少ないひとたちのなかのふたりだった――ファンディアに出会ったころには、すでに敵愾心を持たれてしまっていたのだけれど。

過分に持ち上げるわけでもなく、かと言って貶めることもなく、淡々とした態度を貫いてくれたザイオンのことを、実のところ非常に好ましく思っていたものだから、アタラクシア家のせいで敵視されたときにはかなり落ち込んだものだ。

しかも、相手は政治の世界の荒波を生き抜いてきた強者だった。命を狙われ始めた時は、本気で血の気が引いた――断言できる。もしも自分に精霊たちの加護と幾ばくかの時の運がなければ、確実にこの命は彼の命によって摘み取られていたであろうと！

では、この襲撃は彼によるものなのだろうか――？

その可能性は高いと思われた。

アシュアイードは父侯爵の不慮の死を、極力秘したと言っていたが、そのなかにはザイオンは入っていないはずなのだ。侯爵の右腕にして遠くはない未来の舅である彼にまで、そんな大事を隠せるはずがないのだから。

それでも、アシュアイードが自分を見つけ、連れ戻したことまで彼に告げたとは考えられない。一年前――ウォルセンが完全にマルシアス家の手から隠れることに成功したあの事件が起こるまで、かの家が……つまりはザイオンが、自分に刺客を放っていたことを知らぬ義兄ではないのだから。

それでも――知れた。

この襲撃があった、ということは――つまり。

ザイオンが細心の注意を以て、主たるアシュアイードをも見張っていたということに外ならない。

最後の機会などと殊勝なことは考えてはいないだろうが、恐らく勝算をかなり高く見積もった上での襲撃だろうと、自らの不利が浮き彫りになるだけのことを、ウォルセンは冷静に受け止めていた。

ただ、腑に落ちない事実がひとつ――。

結界術師の存在だ。

アシュアイードはウォルセンを連れ戻した後、彼を完全に保護するために、マルシアス侯爵夫人――後を継ぐべきアシュアイードがまだ独身であるため、当分はその称号は彼女だけのものである――アライセイダが緊急避難しているイーヴの山荘に向かうように言った。

それは、紛れもなく極秘指令であったはずだ。

そうして、その傍らに結界術師をつけることも――。

だが、現実に襲撃はあった。

しかも、結界術師であるリーイン・ル・ファンの張ったそれを破って、現実にこの命を奪うための矢は放たれたのだ。

考えられることは限られる。

(襲撃されることを前もって予想して、それらしい隙を残しておいた……?)

それが一番濃厚な線だ。

怒りは感じない。リーイン・ル・ファンという結界術師に対して、充分な信頼を覚えているなら、自分でもやはり同じ事をしたと思うからだ。

だが……やはり、腑に落ちない。

それは、多分――。

「おい、もういいだろう？　放せよ」

相手は罠に嵌ってくれたわけだし、いつまでも男同士でぎゅうぎゅう抱きついてなくてもいいだろう――？

呆れたようにぼやきながら、ウォルセンは解放しろ――とリーインに伝えた。

黒髪の結界術師の両腕は、固く彼の体を抱きしめたままであったので。

しかし、微かに身じろいだウォルセンに、結界術師である青年は『動くな』と、殺気にも似た気配を漂わせながら命じてきたのだ。

その声に本気を感じ取り、ウォルセンは（まさか）と思った。

これは、自分に知らされていなかったアシュアイードの罠ではなかったのか？

義兄が仕掛けたものではなかったというのか――？

（そんな……まさか!?）

ウォルセンの思いを読み取ったわけでもあるまいが、黒髪の結界術師が彼を抱きしめたまま、いかにも不本意と言いたげなつぶやきを洩らした。

「真面目な話、聞いてないぞ、こんな展開……！」

「ど……！」

どういうことか——と尋ねる暇もなかった。
次の瞬間、世界がぐらりと傾いたのである……！

3

天地がひっくり返った。
馬車が横転したのだと気付いたのは、扉のある部分に背中を打ち付けたせいだった。
思ったほどに痛くなかったのは、抱きかかえてくれていたリーインの腕が緩衝材の役目を果たしたからだろう。
だが、予想もできなかった事態であることに変わりはない。
（横転……？　まさか、大人数で馬車をひっくり返したのか!?）
一瞬ウォルセンはそう思ったが、すぐに否定した。
それらしい動きはなかったのだ――大人数であろうとも、中にいる人間に何の変調も感じさせずに馬車を横転させることは無理だろう。必ず何らかの異変に気付いたはずだ。
しかし、そんなものは感じられなかった。
馬車は、本当に突然横倒しになったのだ――それも、気のせいでなければ重力から護るかの

ように、多少ゆっくりと……。

考えられる可能性は少ない……が、ウォルセンには幸か不幸か、このような一見不可能事に思えることを難なく実行できる存在があることを知っていた。

（まさか……精霊たちが……？）

動いたというのだろうか？

自分にその気配さえ感じさせず、警告のひとつも与えぬままに、精霊たちが攻撃をしかけてきたというのだろうか――。

それは、背筋に冷たいものが伝う、恐ろしい想像だった。

自分に向ける精霊たちの好意をも斬り捨てさせる――それほどの強制力を彼らに対して発揮できる存在が、襲撃者たちのなかにいるということなのだから！

柱神の加護を受けるディエーンではあり得ないことだが、そうでない国の中には、精霊たちに愛された異能者を兵器として利用しているところもあると、以前聞いたことがある。

親愛の情で結ばれるはずの精霊との絆を支配という形に歪めることを強いられた異能者たちは、生ける兵器として扱われるのだと――。

緋色の『聖印』を持って生まれ落ち、精霊たちと交わる異能をも持っていたおかげで、はっきり言って幼少時から不本意なことの多い人生を押しつけられてきたウォルセンではあった

が、その話を聞いたときばかりは、柱神の加護があり、精霊を神々の眷属として尊重するディエーンに生まれたことを心底感謝したものだ。

精霊と交わるということは、彼らの優しさに触れるということだ。

彼らに愛されることで、その恵みを分けて貰うということだ。

だから、ウォルセンはこれまで一度たりとも精霊に対して『命令』など発したことはない。常に頼み、願ってきたのだ。優しい彼らは出来る限りのことをしてくれようとするから——時にそれは過分なまでに——なるべく『頼み事』もしないように心がけてきた。

……まあ、本格的に家出をして以来、追っ手の気配の有無を精霊たちに頼んで探るようにはしていたけれど。

だが、それは精霊を支配することとはまるで違う。

彼らの意思を無視する行為とは明らかに一線を画している。

だが、今回の——この事態にあって、精霊たちは馬車内にあるウォルセンに一言の警告も与えなかった——リーインに頼みこんで、彼の張る結界内に、幾人かの精霊たちを入れて貰っていたというのだ。

そんな彼らが、一言もなかった——だとしたら、考えられることは。

「まさか……精霊使役者が……？　他国が絡んでいるのか……？」

てっきりラルクティア家による襲撃だとばかり思っていたものだから、愕然とした。

しかし、次の刹那、「違う」と力強い声が否定の言葉を紡いだ。

驚いて声の主の顔を見上げる——そう、いまだ自分を庇うように抱きかかえた格好のままでいるリーイン・ル・ファンのそれを。

漆黒の真っ直ぐな髪と象牙の肌、そうして闇そのものを思わせる瞳を持つ年長の青年は、唇を噛み切りそうな険しい表情で宙を睨みつけていた。

「これは、そういう性質のものじゃない……結界術師の力だ」

苦々しげな声には、それ以上の追及を許さぬ力が宿っていた。

だが、そこで引き下がれるほど、ウォルセンは従順な庇護者ではなかった——ただし、それは鋭く追及するためではなく、覚えた安堵の保証を求めるがゆえの行為だったのだが。

「そっか……結界術師の……」

そんなウォルセンの反応をどう受け取ったのか、リーインは「ああ」と乾いた声と瞳で応じた。

「おれの結界に触れるか触れないかのぎりぎりの内側に結界を張り、さらにおれの結界より少し広い範囲にも結界を敷きやがった……二重……いや、おれのまで含めたら三重結界だな。精霊たちとも遮断されたもんだから、あんたもおれもそのことに気づけなかったんだよ」

恐慌状態に陥られては面倒だとでも思ったのか、危機的状況にも拘わらず、リーインはウォルセンに対して状況説明を惜しまなかった。

であればこそ、ウォルセンも気づく――今のこの事態の異常さに。

「結界って、そんなに簡単にすりあわせるように敷けるものなのか？　おれが聞いた話だと、結界同士が反発しあって被害が生じるものだって……そういう……」

それにしては、衝撃が小さすぎたのではないのかと、問いかけた彼に、黒髪の結界術師は自嘲混じりの笑みで答えた。

「……系統が違っていたらの話だな、それは」

術の系統が同じで、術者に充分な力があれば、こんな離れ業だって可能だってことだ――言外に告げられる内容に、ウォルセンは小さくはない衝撃を受けた。

（なんだ、それ!?）

その言葉の意味するところとは――？

反発しない、結界の発動――それは同系統の結界術師が相手側にいるということで、しかもリーインすら気づけぬうちに三重結界を張ったということは、それだけ相手の力量が優れていることを示しており――それはつまり、こちらの絶望的な不利な状況を指し示してはいないだろうか!?

「な……!?」

「縛」

慌てて起き上がろうとしたところに、短い言葉が投げつけられた。

たった一言で、全身の自由を奪われたことに気付いた瞬間、ウォルセンはリーインを呪い殺さんばかりの視線で睨みつけた……が、やはり相手は気にした様子もなく苦笑するばかりだった。

「や、だってあんた、この勢いだと外に飛び出しそうだし」

『当たり前だろう!?』

という言葉はリーインの支配下に置かれては声とならなかった。

「騙されたようなもんだけどな……契約はまだ生きてるし。あんたをイーヴの山荘まで送り届けるまではおれの責任なんだから、これだけは守らないとな。西の世界に生まれたあんたは今一実感湧かないかもしれないけどな、言霊ってのは恐ろしいぜぇ?」

なんせ、反した途端、俺の祖国じゃ覿面罰が当たるし――。

仕方ないから、何とかしてくるよ――。

そう言い、背中を向けたリーインを、ウォルセンは引き留めたかったが、それは叶わぬことだった。

だめだ、と思うのに。
ここで手を離したら『契約の則』に縛られたリーインに待っているのは敗北と死しかないとわかっているのに――縛された全身は、ぴくりとも動かなかった。

横転した馬車の扉から外に出ると、リーインは周囲に広がる光景に眉宇をひそめた。
仕掛けられた結界術の規模から考えて、馬車を横転させることだけが目的ではないと気付いてはいたが、それでもそれは、いささか想像の埒外だった。
鼻につく、錆びた鉄を思わせるすえた臭いを、リーインはよく知っていた。だが、これほど濃厚なものに触れたのは、あるいは祖国であるハーンを出て以来初めてかもしれなかった。
「ひでぇな……」
馬車の周囲を護っていた男たちは、ことごとく血の海に沈んでいた。
そのほとんどは、急所を鋭利な何かによって断ち切られていた。よほどの腕利きであっても、一度にこれほどの人数を抵抗もなく殺せるとは思えない。
（まさか……）

リーインは、背筋に冷たい汗が伝うのを感じた。

一度に複数の人体を好きなように切り裂くことが可能な術を、彼は知っていたのだ。

「……『匣重ね』の術……いや、まさか、そんなはずが……！」

他には考えられない——だが、それはあり得ぬことのはずである。

なぜなら、箱をいくつも重ね並べるように、結界をいくつも組み合わせてひとつの術となし、対象空間内にあるあらゆるものをその結界壁によって切り裂く『箱重ね』は、ハーンでも一握りの術者にしか伝授されていない特殊な術なのだ。

その破壊力のあまりの大きさ、その複雑さゆえに取得するに多大な才能を求められるこの術は、ハーン国皇家直属の結界術師のなかでも、ごく一部の者しか存在すら知らされていない秘術中の秘術なのだ。

その使い手が、ハーンを離れ、西方社会に来ている……？

（あり得ない……）

そう……そんなことがあり得ないのは、誰よりリーインが一番よく知っている——その一員であった彼であるからこそ。

（こんなことが、ハーン以外の場所で繰り広げられていいはずが……）

脳裏に浮かぶのは、いくつもの似たような場面。

むせるような血臭――夥しい数の死体。
それはハーンにあっては……その皇家を陰から支えるべく存在していた結界術師一門の出であるリーインにとっては、見慣れたものだった。
ハーンにあって、皇家は神だった。
実際、『御柱』と呼ばれる存在は、必ず皇家から選ばれ、そうでなかったことなど、長い歴史を振り返っても一度たりとなかった。
ハーンにあって、皇家が絶対とされる理由のひとつである。
そんなハーンでは、皇家に仇なす者は殲滅される運命を持つ。
時に華々しく戦場で散り、時に日の当たらぬ場所でひっそりと死に絶える。
後者の処断に深く関わっていた場所に、リーインは物心つくと同時に身を置いてきた。
その出生がいささか特殊であったため、幸いにも――と言っていいのかどうかはわからないが――血臭の満ちる場に立ち会うことは数え切れないほどあったが、虐殺とも言える術の行使には関わらずにすんできた。
だが、周囲の思惑とは別に、リーインは幼い当時からすでに知っていた。
我が手が直接血にまみれてはおらずとも、その光景を仕掛けた側の一員として目にする以上、実行者と等しく、自らもまた血まみれなのだと。

そうと認識しながら、心が壊れずにあれたのは、当時のリーインにとって――やはり祖国であるハーン、そしてその中核をなす皇家は絶対のものだったからである。

皇家が絶対のものである以上、それに仇なす者は滅びなければならない。

不遜な欲望を抱く者が他に生まれないように、そうした者たちは残酷に引き裂かれなければならない。

何者も、皇家を蔑ろにしてはいけない。

ずっと……そう信じていた。

十二年前――あり得ない人物との邂逅を果たすまでは！

知ったことが幸福であったのかどうか、現実的な見地に立てば否定的ではあるのだが、それでも、リーインは知らずに過ごす曖昧模糊な日々を想像するだけで鳥肌が立つような恐怖と嫌悪を覚える。

あの出会いがなかったら、自分はずっと――見慣れた深紅と錆びた鉄の臭いが充満する世界を、無感動にただ受け入れていたに違いないとわかるからだ。

あれは……ハーンが当たり前のように繰り返していた粛正は、当たり前であってはいけなかったのだ。

そうしてリーインは幾多の事情が重なった結果、ハーンにいることが許されぬ身となり、祖

国を後にしたのだ。

そうして、初めて知った――ハーンのあり方の歪さに。

西方社会は、ハーンに比べて支離滅裂だった。

言霊の支配力は薄い、なのに東方社会出身者には、なぜか故郷と同じだけの圧力をかけてくるのだ。

国を逃れて西方社会に流れついた当初は、そのあたりの事情の違いにずいぶん苦労させられた。

それでも――途中で気付いたことがいくつかあった。

西方社会の人間が、『言霊』に縛られていないわけではないということ。

ただ違うのは、『言葉』の意味を広義に捉える、あるいは別解釈を試みるということだ。

だが、今のこの状況は――!?

明らかに感じ取れるハーンにおける禁術の気配――それを隠そうともしない、この明らかな気配のあり方は――。

（まさか）

そう、信じたかった。

（あり得ない）

あり得ないことだと思いたかった。

だが、この目の前に広がる深紅に満たされた光景が意味するものは――。

（まさか、あの人たちの誰かが……？）

脳裏に浮かぶのは祖国にあっては家族以上の絆で結ばれていた兄弟子たちの顔。

血の気が引く――結界術師としてだけならばともかく、刺客としての技量は、明らかに兄弟子たちが勝っている。

そんな兄弟子の誰かが追っ手なのだとしたら、到底逃げ切ることはかなわない――そう思った瞬間のこと、濃い血臭に満ちた空間に冷ややかな声が響いた。

「……ファン」

怒りをたたえたその声に、リーインは全身を凍り付かせた。

からくり仕掛けの人形さながらに、ぎこちなく声のした方を振り返った彼は、殺気溢れる兄弟子の姿を認めた。

十年前、決別した同門の兄弟子は、迷いとも怒りともつかぬ炎を双眸に宿してリーイン・ル・ファンを睥睨した――。

4

「……ルアン……兄……」

そこに立っていたのは、本来ならばいるはずのないひとだった。

二度と戻ることは叶うまい祖国ハーンにあって、師父の元、絶えなき研鑽を積んでいるはずの男だった。

呆然と、リーインは相手の名をつぶやいた。

まだ、現実だとは認識できていなかったのかもしれない。

だが、そんな状態をいつまでも許す相手ではなかった。

「なにを腑抜けている」

短く、冷ややかな眼差しを向けてくるひとは――見間違いようもない。

師についたその日から、あれこれと面倒を見てくれ、最も親しき縁を築いた……同門の兄弟子ルアン・ナ・フェイだった。

祖国にあっては珍しい……否、異質とも言える赤い――実際は色素が薄いだけで、西方社会ではありふれた色彩なのだが――髪と、やはり色素の薄い明るい茶色の瞳ゆえに、ハーンではなにかと異端視されつづけていた、だが自分にとってはかけがえのない兄弟子の姿を目にした瞬間、リーインはやはりこれは夢か、と思った。

なぜなら、自分の知っている兄弟子ルアン・ナ・フェイは、師匠であるひとの秘蔵っ子のひとりで、遠くはない将来、ハーンの未来を担うはずの人物だった。

間違っても、こんなハーンから遠く離れた場所で再会するような、そんなひとではなかったはずなのだ！

「なぜ……？」

あなたがこんなところにいるのかと、問う声はひどく掠れていた。

がくがくと肩が震えそうになる――事実指先のそれは隠すのが精一杯だ。

ルアンがここにいる意味――それを考えるだけで心臓が凍り付きそうだった。

そんなリーインの心中を知ってか知らずか、赤い髪の青年は微かに双眸を細くした――笑んだのでは、なく。

「理由を、お前が聞くか、ファン。ハーンの宝を抱え込んだ上での出奔など……我が一門にあってはならない醜聞を巻き起こしたお前に追っ手がかからぬなどと、まさかそんな暢気なこと

を考えていたわけではあるまい」

男らしい低い声は、いまは極寒の地を吹き荒れる風のような凍気と鋭利さに満ちている。

声そのものが形を持つならば、間違いなくこの声だけで、向けられた相手は全身を凍り付かされ、切り刻まれることだろう。

宿る感情の激しさが、伝わってくる。

「……兄……！」

恐らく、そう受け取られているだろうことは、リーイン自身覚悟はしていた。

祖国を出奔する際、巻き込まれた悲惨な状況は、あまりにも謎が多すぎ、血が流れすぎていた。

そこで自分が姿を消せば、どういう目が向けられるかはわかりきっていた。

それでも、あのときリーインは祖国に留まることは出来なかったのだ——切迫した事情を抱えていたのだから。

「一門の誉れを地に堕とした反逆の徒に、そのように呼びかけられたくはない」

「兄っ！　違います、誤解です……！」

一縷の望みをかけて、国を出る前に事情を認めた書状を師父たるひとに送ったのだが——この兄弟子の様子からして、届かなかったのは明白だ。

（あるいは、信じてはいただけなかったのか……）

それもまた、可能性のひとつではある――尋常でない内容であった自覚はある。

必死に言いつのるリーインを前に、ルアンは氷の気配を解かぬまま、「誤解？」と薄く嗤った。

「現世に恋々とする御柱候補に情を移したりはしていないと……？」

嘲りも露な言葉に、リーインは一瞬詰まった。

脳裏に浮かぶのは、未だ幼さの目立つ子供――歪められた運命に嘆きながらも抗っていた。

そのひたむきな態度に心惹かれたのは確かだ……情を移したと言われても否定はできない。

しかし――。

「挙げ句、その候補者のためだけに選の巫女の元に押し入り、理を曲げることを肯じなかった巫女に刃を向けたことも？」

リーインははっと息を呑んだ。

「兄！　それは違います！　あの夜、おれ……いえ、わたしたちは、選の巫女から文を受け取りお訪ねしたのです！　ところがわたしたちが着いたときにはすでに……！」

思い出す――屋敷全体に充満していた血の臭い……。

しかし、リーインの言葉はルアンの逆鱗に触れるものでしかなかったらしい。

「戯れ言を口にするか！　生き延びた家人たちは、誰もその日客がくるなどとは聞いてはおらぬと言っている！　しかも屋敷に残されたのはお前たちの痕跡のみ……この期に及んで見苦しく言い逃れか！　恥を知れ！」

とりつく島もないルアンの態度に、リーインはきつく唇を噛みしめた。

（やはり……そういうことにされてしまったか……）

予想していた事態ではあったが、誰より信頼するひとたちから、蔑みの目を向けられると正直胸が痛んだ。

ここでいくら誤解だと叫んでも、ルアンは聞く耳を持たないだろう……ちりちりと肌が灼けるような気魄を感じ、そう確信する。

（……仕方ない……）

それは決定的に一門と袂を分かつことを意味するが、迷っている場合ではなかった。

リーインはこの場で殺されるわけにも、捕縛されるわけにもいかないのだから！

すう、とひとつ息を吸い、ゆっくりと吐き出すと、リーインは真っ直ぐにルアン・ナ・フェイを見つめた。

「……師父は、なんと……？」

最早意味を持たぬ問いではあったが、ルアンにはそうではなかったようで、眉宇に深い皺を

刻んで答えた。

「大層なお怒りだ……さもあろう、目をかけていた愛弟子が、よりにもよって国を揺るがしかねぬ大罪を犯したのだ。先日ようやく謹慎が解かれたばかりだ。御自らお前を追うと仰ったが、邪推を招いてはならぬということで、わたしが命を受けた」

ふつふつと、抑え込みきれぬ怒気がルアンの全身から立ち上る。

「……一門の恥は、一門が雪がねばなるまい」

静かな口調で、ルアンがそう告げた次の刹那――！

ざっ、と空を切り裂く音が響き渡り、彼の背後から無数の刃にも似たなにかが放たれ、リーインを襲った！

しかし、読んでいたリーインの体はすでにそこにはなく、空しく大地に鋭利な裂き傷を作っただけだった。

そして、そのお返しとばかりに、ルアンの足下に五芒星の輝きが出現する。

「……縫縛か……甘い！」

袖にでも隠し持っていたのか、ルアンの左手が隠剣を放ち、光線を断つと、それは即座に消え失せた。

だが、その動作のために要したほんのわずかな時間こそが、リーインにとっては重要だった

のだ。

詠唱不要の足止めの結界をふたつほど配し、リーインは懐から取り出した八粒の玉に意識を向けつつ必要な言霊を繋いだ。

「……髪に影あり、背に影あり、指に影あり、膝に影あり……影とは地に這い、縛らるるもの……此に体と影の絆二重三重に縒りあわせることにより、絆幾層倍の強さとなす！」

詠唱を終えると同時にリーインは掌中の玉を天に放り投げた。

円を描くように宙に舞った八粒の玉が眩い光を放つと同時に、ルアン目がけて矢もかくやという勢いで落下する！

「光矢影縛！」

「甘いと言っている！」

ルアンの一喝が空を震わせる！

びりびりと震える空気のなか、ルアンの放った隠剣が八粒の玉をことごとくはじき飛ばすのを、舌打ちしながらリーインは認めた。

（やはり……強い！）

実戦におけるルアンの強さは、一門でも一二を争うものだった。

顔を合わせた時点で、リーインが無傷で逃げ延びられる可能性は皆無だった。だが、これほ

どにたやすく術のすべてを破られるとは――！

（仕方ない……一か八か……）

戦いにあって賭けは禁物だ――だが、どうしても賭けなければならない場面になったとき、躊躇いは禁忌だ。

機会は恐らく一度きり――。

リーインは再び懐に手を入れると、今度は鏃のような形の漆黒の石を四個取り出した。

それを、固く握りしめる――皮膚が裂け、血がにじみ出すのを感じるが――気にはしなかった。

「……我が髪は我が命。我が息吹は我が命。我が血潮は我が命。而して我が命に触れたる物は我が命に連なる物なり。我が意に従う、すなわち我が手足なり！」

ルアンが驚きに目を瞠った。

「影命網縛だと!?　……させんっ！　『重匣』の二！」

叫びと同時に、リーインの周囲の空間が撓んだ。

（まずい！）

反射的に地を蹴り、二個の匣状結界の刃から何とか逃れたリーインだったが、完全に避けきることはできなかった。

石を握る右の二の腕に、ざっくりと切り裂かれた傷が走っている。
（感覚が鈍い……筋をやられたか!?）
最悪な予感を裏付けるように、ルアンが声をかけてきた。
「無理をするな。下手に動くと一生使い物にならなくなるぞ……そもそも、おれはお前を殺すために来たわけではない。おとなしく縛につくというのなら、傷の手当てもしてやろう。舞を思わせるお前の指奏結界術を、このようなところで喪いたくはあるまい？」
その声に、先ほどまでの苛烈なまでの怒りは感じられない。
完全に消えたわけではないだろう――だが、激情が治まるだけの余裕が生じたのは確かなことだった。
リーインが得意とする、両手の指を用いての指奏結界術は、確かにこの状況では封じられたも同然なのだから……無理を圧して揮ったところで、本来の効果と規模には到底及ばないのは目に見えている。
だが。
どうしても、譲れぬことが、ある。
「……点は一にして点に過ぎず、点は二にして線に過ぎず、点は三にして面に過ぎず、点は四にしてようやく『空』を成す。我が掌中に四粒の我が意を宿す核あり。しかしてこの四粒の核

により、我は作る――我が意たる『空』を！」

四面結界――リーインがこれから構成するそれは、最も安定度が高くしかも抜群の強度を誇る正四面体のそれだった。

しかし、そんなリーインに、ルアンは動揺する素振りを見せはしなかった。

「……やはり、足掻くか。だが、もう遅い」

淡々とした口調で、彼はつづけた――決、第十六核、と。

刹那――。

人間の耳には不可聴な音が空間に響き渡った。

そうして、リーインが立っている場所の上空に、対角線を同じくする大小の長方形を描く八個の光が出現する！

はっと息を呑み、足下に目を向けたリーインは、地中にも同じものを感じ取り、さっと顔色を変えた。

（二乗層結界っ！）

二つの全く同じ辺率の長方体――時に正方体――をぴたりと配置することによって発動するこの結界は、単純な二重のそれとは比較にならない封鎖力と強度を誇る。

結界は結点――核とも呼ばれる――の数が多いほどさまざまな効果を付加させることができ

るのだが、全ての結点を同じ状態で安定させなければならないため、面数の多い結界ほど扱いが難しい。

だが、だからこそ――二乗層結界の力は圧倒的である。

これに捕らわれ、逃れられた者はいない。

（いや、まだだ……諦めるな！　まだ完全に第十六結点は繋がりきっていない！）

繋がってしまったら、最後だ。

リーインは捨て身の賭けに出た。

「第一結点、第二結点、第三結点、決！」

二乗層結界の最後の結点がある地点を中心に、リーインは三石で正三角形を描いた。

それと同時に自らもその内部に駆け込んだ。

「ファン!?　何をする気だ」

思いがけないリーインの行動に、さしものルアンも驚きの声を上げた。

「まさか、結点を封じることで結界を無効化する気なのか!?　馬鹿な真似はやめろ！　いくら同門とはいえ、そんな状態で結界同士がぶつかったら……っっ！」

「承知の上です」

兄弟子の焦る顔を見つめながら、リーインは掌中に残っていた最後の黒石を真っ直ぐ上に投

じた――そうして、それがある点にかかった瞬間。
静かな声が、術の完成を宣言した。
「決――第四結点」
結ばれる四つの点――誕生する、先に構築されつつあった絶対的空間を浸食する新たなそれ……その現象が呼び寄せた事象は。
世界を灼き尽くさんばかりの苛烈なる光――そして。
光が消えたその後には、巨大な爪で抉り取られたような大地が残っているだけだった。

強大な力と力がぶつかり合い、その中心地は荒野と呼ぶのさえ憚るようなありさまをたたえるそこで、ルアン・ナ・フェイはぎりぎりと奥歯を噛みしめていた。
「リーイン……っっ！」
相対しているときには、決して口にしなかった弟子の名を絞り出す。
「お前というやつは、どこまで……っっ！」
押し殺した声には慟哭が溢れていた。

しかし、それは数瞬のこと――。

リーインとルアン、それぞれが前もって張ってあった結界の外側には、一切の被害はなく、暫定的な雇用主の使用人が恐る恐るといった体で、すでに解いた結界の境目であったあたりから顔を覗かせた。

「なんだ？」

リーインを見いだすまでの期間を限っての契約主のその配下に、最早儀礼的な言葉さえ返すつもりもなくなったルアンの声はどこまでも平坦且つ不遜だった。

しかし、自分たちの知らぬ間に繰り広げられた一幕を知らぬ男は、状況の変化を読み取ることもできず、以前と同じく耳やかましくがなり立てた。

「なんだ、じゃないだろう!?　なんだ、この有様は!?　こんなことで、本当にあのお方がご無事かどうか……そうだ、まずそれを確認せねばならんのだ！　わけのわからぬ力のせいで、馬車の扉が開かぬのだ！　お前の同郷の輩の仕業であろう!?　早う開けろ！　同郷の者なら容易いことであろう!?」

まくしたてられた内容に、ルアンは一瞬呆然とした。

祖国を同じくする、同じ結界術師の張った結界なのだから、解くのは簡単だろう――相手はそう言っているのだ。

胸の奥底から、真っ赤に燃える鉄の塊のようななにかがせり上がってくる。
それは、怒りにも似ていた。
だが、その感情に身を任すには、ルアンは精神の統一の取れた結界術師でありすぎた。
「……どこだ」
その、問題がある場所とやらは？
尋ねてやると、「なんと、相変わらず不遜な……」などと文句を洩らしつつも、明らかに安堵した様子で案内し始める男を見やりながら、ルアンは密かに息をついた。
契約の内容は、すでに果たしている。
このうるさい家人がどう思っているかはともかく、契約主とは自分が捜している相手――リーイン・ル・ファンを見つけるまでという条件でつきあい、ときに力を貸しても来たのだ。
リーインを見いだした以上、契約は終了した。
それでも――あの結界反発の中心地に近い場所にあっても、完璧な結界で護られた……横転した馬車の中にいる人物に、それなり以上の関心を覚えたから、いま、こうして契約以上の力を貸してやろうとしているのだ。
だが、本当にそれが最後だ。
その後は、全力で捕獲する。

リーイン・ル・ファン――あれは生粋の結界術師にして、すでに人間の範疇から外れた危険すぎる獣なのだから。

体の自由が戻ったのは突然だった。

その少し前に馬車を包んでいた薄い膜にも似たなにかが解かれるのを感じたとき、ウォルセンは軽い違和感を覚えたが、束縛が解けたことに対する安堵が大きかったせいで、すぐにそのことは忘れた。

（戻って来たのか……？）

そうとしか思えない。

結界に包まれた馬車の中では、外でなにが起こったのかは一切窺い知ることはできなかったが、相当なにかが起こったらしいことは、ウォルセンも感じていた。

いまは、静かになった外の世界――そうして戻った体の自由。

あの、得体は知れないが相当な実力を持っているのだろう――アシュアイードが護衛につけたのだから、そうとしか考えられない――結界術師が戻ってきたのだとしか、ウォルセンには

思えなかった。

だから――。

ふわり、とやわらかく横転した馬車が立て直されたときも――精霊でも人力でもない力によるものだとなぜかわかった――暢気なことを考えていた。

（……そう言えば、以前ロスタロイドの屋敷の結界張ってた結界術師のひとりが、訊きもしないのに滔々と結界術理論とか喋ってたよな。自慢話が中心だったけど、中には面白い話もあって……そうだ、物理学に通じるものがあるとか思ったんだっけ。結点だとかはわからないけど、力点とか重心とかが重要な位置を占めてたような……つまり、結界術には空間を固定するって一面もあるってことか。もしかして、馬車を戻したのもその応用なのかな？）

等々。

襲撃者はどうなったのだとか、実際どこの手の者だったのかとか――考えなければならないことは他にもあったのだが、好奇心の虜となってしまったウォルセンはそんなことをあれこれ考え、しかも戻ってきたリーインに尋ねてみよう、とまで思っていた。

すべて、扉の向こうにいるのがあの結界術師だと信じていたからだ。

しかし――開いた扉から現れたのは。

その顔を目にした瞬間、ウォルセンの全身は凍り付いた。

信じられない――否、信じたくない人物が、満面の笑みで彼を見つめていたのだ！

（そんな、まさか……!?）

夢だと信じたかった――悪夢であっても、これが現実だというよりは、数倍ましだった。

「あ……」

声が、掠れた。

驚愕のあまり、瞬きすらできないでいるウォルセンを、その人物――栗色の髪と暗い緑の瞳を持つ二十代半ばの青年ウィーカルド・ナスター・オルス・アタラクシアは嬉しそうに見つめていた。

その口からこぼれ落ちたのは、耳を疑うような言葉――。

「我が君……ウォルセンさま。正統なる一族の導き手であるあなたさまを、ようやくお迎えできるこの喜びを、どのような言葉で表せばいいものか……」

感に堪えぬと言いたげに、歓喜に輝く青年を前に、ウォルセンは強烈な違和感を覚えた。

なぜ、ウィーカルドがここにいるのか――リーインは、どうなってしまったのか？　アシュアイードがつけてくれた警護の者たちは？

わかりきっている答えから目を逸らし、それでも彼は問わずにはいられなかった。

「リ……あの結界術師と……わたしを警護してくれていたひとたちを……？」

どうしたんだ――。

はたして、返ってきたのは残酷な言葉だった。

「心配は無用です。邪魔者はすでに排除いたしました……貴方が気にかけるようなことはなにひとつありません」

まるで蟻でも潰したにすぎないかのような傲慢且つ高慢な答えを、にこやかに口にするウィーカルドの様子に、ウォルセンは血の気が引くのを感じた。

他者に従う者を駒扱いする者が多いことは、マルシアス家本家で過ごす内に知りたくなくとも知らざるを得なかったことだったが、ここまであからさまな態度で表されることはこれまでなかったのだ。

呆然とするウォルセン――そして、その内心を理解しないまま笑顔で手を差し伸べてくるウィーカルド。

名家の闇――あるいは権力に執着するあまり生まれた闇、それとも脇目も振らずに妄信した結果のもたらしたそれの結実した姿を、ウォルセンはウィーカルドに見た。

「殺したのか……みんな？」

ウィーカルドは無邪気に頷く。

「はい、すべて。これでこの現場から後を辿られる懸念はありません」

違いすぎる認識に、ウォルセンは目眩を覚えながら、これもまたマルシアス家の抱える闇の一部なのだと悟った——絶望とともに。

5

時を遡ること四日――。

エアランの街の小路の先――行き止まりとなった壁を前に、ナルレイシアとスカルトードとアゼルフィアは立ちつくしていた。

「え、と……」

最初に声を上げたのは、赤味の強い栗色の癖毛と明るい緑の双眸を持つ、三人中一番の年少者である少女だった。

「……いま、男のひとがふたり、消えませんでしたか……？　目の前で、確かに消えましたよね……えーと、でもこの壁は本物だし、抜け道も見あたらないし……そんなはずないわけで……でも、でも……えーっ!?」

なにが「えーっ!?」なのかは本人にもわかっていないに違いない。

しかしその言葉に年長者ふたりの口から、彼女の混乱を鎮めるような言葉が紡がれることは

なかった。

なぜなら、年長者其の一である金髪の少女ナルレイシアもまた、目の前で起こったことを理解できずにいたからである。

（ええぇっとー、ウォルセンさん、ようやく見つけたと思ったら、なんでかロスタロイドのナサリエル公爵のところにいた結界術師が一緒で、でも、ウォルセンさんは追い詰められている風で、だからウォルセンさん確保兼保護のためにスカーさんに動いてもらおうと頼みかけたんだけど、そうする間もなくふたり揃って姿が消えちゃって……）

多分、恐らく、きっと、絶対――あの黒髪黒瞳の結界術師が関わっているのだろうとは思うのだが、なにが起こったのかについては皆目見当が付かない。

いくらほとんど分野無視の方向の活字中毒者であろうとも、遙か東方で発達し、こちらにはほとんど知られていない結界術の詳細まで把握できるものではない。

衝撃を受けて混乱しているのはアゼルフィアとほぼ同じだった。

残る年長者其の二こと、足の爪を傷めたナルレイシアを抱きかかえたまま、ここまで走ってきたばかりか剣まで揮った金髪の青年――スカルトードだけは少し様子が違ったが、頭がぐるぐる状態の少女ふたりに気づけるほどのものではなく、しかも彼自身進んで口を開こうともしなかったため、状況は膠着したままだった。

「ええ……と……もしかして、幻覚？」

恐る恐るといった体で、アゼルフィアがひとつの可能性を提示した――混乱が治まっていないのがあからさまにわかる内容ではあったが。

「……三人揃って？」

突っ込みを入れたのはナルレイシアだった。

彼女は確かにここにウォルセンがいたことを確信していた。

そうして、いま、かき消すように彼の周囲を包んでいた不思議視界における「きらきら」が跡形もなく消え失せてしまったことも。

彼はいた。確かにいた。

そうして忽然と消えたのだ。

まず間違いなくあの結界術師のせいで！

「まったく！　忌々しいあの男！　ひとの邪魔して麻薬漬けにしかけただけでは飽きたらず、今度はウォルセンさんにまで毒牙を伸ばすだなんて！」

憤然と叫んだ彼女に、アゼルフィアが驚愕の眼差しを向けてきた。

「ええっ!?　あの黒髪の、ちらっとしか見えなかったけど、結構格好良くて優しそうなひと、そんな悪党なんですか!?」

……世間の荒波に揉まれていても、やはり年頃の女の子というべきか――アゼルフィアはしっかり件の結界術師の顔をチェックしていたらしい。

しかし、ナルレイシアはこの言葉に猛反発した。

「なにっ!?　アゼルフィア、あんなのが格好いいとか優しそうだなんて思うの!?　それは大きな間違いよっ！　あんなのに好意抱いたって、絶対ろくな事にはならないんだから、その好みは改めるべきだわ！」

こぶしを握りしめての強硬主張に、しかしアゼルフィアはうなずかない。

「えー？　でもちらっと見ただけですけど、確かに格好良かったですよ？　それにやっぱり優しそうだったし！」

「それは目が曇っているか、好みが変わっているのよ！」

ナルレイシアのかなり乱暴かつ失礼な決めつけに、さしものアゼルフィアもかちんと来たらしい。

据わった目で逆に突っ込んできた。

「ふうぅぅん……じゃあ、曇ってない目と変わってない好みのナルレイシアさんは、いったいどんなひとなら格好いいとか優しそうだとか思うんです？」

半ば以上喧嘩腰である。

しかし、勢いというものは恐ろしい。

ナルレイシアはさらりと即答した。

「怖いけど格好いいひとはネイスリーズさま、優しそうなのはアマンシールさま、かなぁ。優しくて雅で、でも時々とっても漢らしい言動を取られるファティ・リンシャも、格好いいの方に入るのかしらん？」

「って！　全員、柱神さまじゃないですかあぁぁっっ！　わたしは人間基準で訊いたのに！」

「し、仕方ないじゃない！　印象も記憶も強烈な衝撃を受けたものほど残りやすいんだから！」

すでに両者の会話は本筋から大きくずれた上に、なにやら違う次元に踏み込みつつあった。

そんな不毛な螺旋を断ち切ったのは——いや、断ち切らざるを得ない立場に追いやられたと言うべきか——少女ふたりの会話に、がっくりと肩を落としていた金髪緑眼、人外魔境の美貌を誇る青年だった。

「ヴィル・ダカール」

静かな、静かなその声に、軽くはない疲労の色が滲んでいたことに、ふたりの少女が気付いたか否かは定かではない。

ただ、彼が背後から漂わせる呆れと諦めと疲労感と……まあ、そういったさまざまな感情が

入り交じったモノの迫力が、尋常でなかったことだけは明記しておこう。
「ひとまず宿に戻りませんか？」
ナルレイシアに向けられたスカルトードの灰緑の瞳には、確かに穏やかな光が宿っていたのだが……しかし。
なぜか。
「え、と……スカーさん……？」
どうして背筋に冷たいモノが伝うのだろう……？
理由はわからないままに、しかし本能――彼に逆らってはいけない、という――の声に従うべきだとなぜかナルレイシアは確信した。

そうして――。
ファティ・リンシャやガスカールが待つ、エアランにおける宿『白鷺館』に戻ったナルレイシアが聞かされた話は、はっきり言って尋常なものではなかった。
「は？　マンディアル族？　マーシャス一族？　マルシアス家？　……それっていうか、その

一族と縁のある方……？　ウォルセンさんが……？」

顔中――どころか頭上に疑問符を大量発生させながら、ナルレイシアはガスカールによる性急すぎる説明に混乱を来していた。

無理は、ないのだ。

なにしろスカルトードに抱えられた格好で白鷺館に戻った彼女の顔を見るなり、ガスカールはものすごい勢いでまくしたててくれたわけなのだから。

因みに、彼が口にした台詞は、要約すれば「マルシアス家縁の人間を新たな柱神と認めることがどんな騒ぎをまきおこすのか、わかっているのか!?」というもので、その後ファティ・リンシャやスカルトードがあれこれと補足説明してくれたわけだが、いかんせん情報量が多すぎて、ナルレイシアにはすぐに理解することはできなかったのだ。

（ええ、と……マンディアル族ってのはあれよね？　東西世界を分断するエルアク山脈に住んでる高地民族で……騎馬による戦闘が得意だってことで、傭兵民族と呼ばれてるっていう……で、マーシャスはその分家というか、一派というか……）

ナルレイシアの活字中毒は伊達ではない。

指向性がないとは言い切れないが、彼女は概ねそこに『活字』が存在するかぎり、よほどの苦手分野――初歩的でない数学や物理学がこれに数えられる――でもなければ、砂地が水を吸

い込むように、頭の中にその内容をそれなりに整理して蓄え込むという技術を持っていた。
だもので、告げられた鍵となる言葉から、さまざまな情報はすぐに脳裏に浮かぶわけであるが……しかし。
（で、そのマーシャス一族か、その末裔が先々代のディエーンの王と意気投合してディエーンに帰属した、と……）
要略すれば、そういうことである……と、ナルレイシアは理解した。
理解はしたわけなのだが。
そこで、彼女が覚えた疑問は、至極簡単明瞭なものだった。
「あのー、それでなんで未だにマルシアス家が問題視されてるわけ？」
それがどうにもわからない。
マルシアス家がディエーンに帰属したのが、先代のエルスース王家であったのなら、結果としてその座を奪ったことになる現王家との間にぎくしゃくしたものが生じたところで仕方ないと思えたかも知れない。
だが、ディエーンの王家はさらに一度の交代を迎え、現在王家と呼ばれるのはファラスースの姓を持つ一族だ。
マルシアス家との間に確執はないはず――。

「なのに、なんでそこまで警戒するようなことを言うわけ!?」
食ってかかるように、ナルレイシアはガスカールに問い詰めた。
対する黒髪の青年の声は怒気に満ちていた。
「警戒しないわけがないだろう！　マルシアス家の忠誠は先々代王家にのみ向けられたものなんだぞ!?」
そんな家を、どうして信じられるんだ!?
声高にそう主張するガスカールに、ナルレイシアは苛立ちを抑えきれない。
「だから、なんだってそう決めつけるわけよ!?　そりゃあまあ、忠誠誓った王家を滅ぼした先代王家に対しては恨みとか抱いてたかもしれないけど……それだって、途中で解れてたかもしれないじゃない。いつまでも疑われてたら、そりゃあ相手だっていい気持ちしないし、意地になっちゃうことだって――」
あるかもしれないじゃない――。
そう主張するより先に、ガスカールの怒号が室内を満たした。
「知らない者が勝手なことを言うな！」
「な……」
教えてもくれないこと、知らないのが悪いっていうの!?

そう噛みつきかけたナルレイシアだったが、かなり身勝手な台詞を吐いたガスカールの方が苦しそうな表情をしているのに気付いて、言いかけた言葉を呑み込んだ。

「知らないくせに」

ガスカールは宿敵でも見つけたかのような眼差しで、変わらずこちらを睨みつけてくる。

（知らないわよ）

その眼差しを正面から受け止めながら、ナルレイシアは思った。

（教えてもくれないくせに……）

なのに、傷ついたような目をするのは狡いと思った。

「なにを……」

知らないって言うのよ!?

そう問い返そうとした瞬間、ガスカールが絞り出すような声で零した。

「……マルシアス侯爵は、これまで一度たりと王宮に顔を出したことがない……エルスース王朝が興って以来ずっと、だ！　そんな当主を担ぐ家を、どうして信用できるというんだ！」

あまりといえばあまりな言葉の内容に、さしものナルレイシアも声を失った。

（一度も……？　えーっと、確か貴族の当主は最低年に一度は王宮の行事に出席しなくちゃいけない決まりがあったんじゃなかったかしらん？　それを危急の場合に限って名代も認められ

てるって話はアマンシールさまから伺った覚えがあるけど……でも、ずっと顔を見せないって……それも王家が興って以来ずっとだなんて……って、ちょっと待て）

はた、とあることに気づき、ナルレイシアは愕然とした。

「……エルスース王朝……？」

現在の王家はファラスース家である。

エルスース家は先代王家であったはず――。

その先代王朝が興って以来――というのなら、だ。

「かれこれ四百年も王宮に顔を出してないってこと!?　ちょっと、待ってよ、侯爵って、あれでしょう、公侯伯子男の爵位の中で公爵に次ぐ二番目に高い爵位でしょう!?　大貴族なんでしょう!?　そんな大貴族にそんなことが許されるわけ!?」

普通に考えたらあり得ない話ではないのか。

二年や三年なら、長患いを理由に、当主名代も認められるかもしれない――しかし、期間が違いすぎる。

（……よんひゃくねん……）

改めて考えるまでもなく、それはとんでもない時間であり、話だった――。

「……だから、あの家は厄介だと言ってるんだ」

苦虫を噛み潰したような顔でぼやくガスカールを見つめながら、それは確かに厄介というか……途方もない家だわねえ、とナルレイシアはため息を洩らしたのである。

6

パースアルのマーシャス伯爵とディエーンの年若い将である王子が、突然の嵐と落雷によって味方の軍から外れ、よりにもよって同じ洞窟に避難することになったのは、紛れもない偶然がもたらした珍事だった。

先にその洞窟を見つけたのは、ディエーンの王子の方だった。

名をアルスレッド・サフィアス・アルス・ウクルルス。

当時二十歳になったばかりの王子は、パースアル軍との戦闘中、突然両軍の間を切り裂くかのように走った雷光ゆえに、なぜかひとりはぐれることとなった——そこに、王都ロスタロイドにいる近しい血縁者の干渉があったかどうかはわからない。

なんにせよ、このときアルスレッドは孤立無援の状況にあり、そうして彷徨い歩いていた先に偶然洞窟を見つけ、駆け込んだに過ぎなかった。

そうして、もうひとりの当事者——。

パースアルの伯爵タリウェン・ラーウィア・ガーヤ・マーシャスもまた、この奇禍で信頼できる部下たちとはぐれ、その洞窟を見つけたのだった。

（助かった）

と、心底思い、駆け込んだところには……先客がいた。

言うまでもない、アルスレッドだ。

しかし、この時ふたりに面識はなく、当然のことながら、互いの正体など知りようがなかった。

しかし、両者が身につけていた軍服の違いは明らかだった。

アルスレッドが着ていたのはディエーンの王族のみが許される鬱金色の刺繍が施された上衣であり、一方タリウェンが身につけていたのは、パースアルにあっては将官以上にしか許されない、藍で染め上げられた絹糸でもって全面に刺繍を施されたもの――。

互いが誰かを感じ取る――あるいは読み取るのに要した時間は瞬きほどで充分だったろう。

一瞬にして、洞窟内に殺気が満ちる。

互いに睨みあいながら、だがそれ以上ぴくりとも動けない緊張状態がどれほど続いたのか、両者にも正確には計りかねたろう。

その張り詰めた空気が緩むきっかけとなったのは、ふとタリウェンが気付いたひとつのこと

だった。

アルスレッドが咄嗟に構えた剣――ではない、どう見てもそこらで拾って来たとしか思えない枯れ枝から、ぽとん、と水のしずくが落ちたのだ。

危急の際に、武人たるもの武器は選ばない――枯れ枝などと侮ることはできない。技量と機転さえあれば、世の中で武器とならぬものなどほとんどないのだから。

だから、タリウェンも、洞窟に入り、アルスレッドと互いを認め合った瞬間、彼が丁度手にしていた枯れ枝を構えたときも何とも思わなかった。

しかし……一滴のしずくが、彼のなかのなにかを喚起した。

ひた、と敵将――相手にとっては自分も同じであるのだが――を見据えたタリウェンは、ようやく違和感の正体に気づいた。

アルスレッドが構えているのが枯れ枝であることではない。

ぽたりとしずくが落ちたことに関してのことだ。

よく見れば、彼の体の陰になってよくわからなかったが、アルスレッドのそばには似たような濡れたままの枯れ枝が山積みされていた。

ひどい雨と雷だが、洞窟の結構奥であるこのあたりには風雨も届いていない。

ということは、あの枯れ枝の山は、アルスレッドがわざわざ外で集めて持ち込んだわけだ。

しかも、その山とは別に置かれた枯れ枝が、彼の正面にもある。
こちらは枝の角度や何やらを考えて、空気が通るように枝同士が組み合わされている――濡れたままでは意味はないが。
これらの事実を鑑みるだに――アルスレッドには申し訳ないが、なんとも情けなくも愛嬌のある事情が浮き上がってくるというものだ。
「焚き火、熾そうとしたのか……」
このとき、タリウェンの声はマーシャス一族すべてを背負う当主のものでも、またパースアルの国境を護る最強の将軍のそれでもなかった。
焚き火を熾すために、かなり結構な量の枯れ枝を集めたというのに、その努力が報われずにいる無知な人物を哀れむという、相手にとっては甚だ不本意であるに違いない感情を露にしたものだった。
その声音の示すものに気付いたのだろう、アルスレッドはぎりりとタリウェンをねめつけてきた。
「……何が言いたい……」
初めて発されたアルスレッドの声は、氷の如く冷え切っていた。
「何、ってね……まあ」

肩を竦めながら、気のない声でタリウェンが応じた。
しかし、その行動は瞬速を誇り、その腰から抜かれた大刀は、アルスレッドの体を両断するためではなく、その利き腕に握られていた枯れ枝を宙に舞わすために振るわれた。
ひゅん――。
勢いよく宙に舞った枯れ枝が、鳴子さながらに音をたてながら回転しつつ――いつの間にか剣をおさめたタリウェンの右手に収まった。
「こういうこと」
にやり、と呼ぶにふさわしい笑みを浮かべるなり、彼は手中に舞い込んだ枯れ枝を、それが木剣であるかのように勢いよく一振りした。
枝の表面にあった水滴が、その一振りで空中に四散した。
「あ……」
なにかに気付いたのだろう、アルスレッドがはっとしたように声を洩らした。
その反応に気を良くして、タリウェンも笑った。
「そういうこと」
水に濡れたままの枯れ枝でなど焚き火はできない。
一番の解決法は枝の水気を拭き取ることだが、それもできない状況であるなら、枝に絡みつ

いた水気を払い落とすしかない。
どれほど数を集めていても、水気をしたたらせるほどに帯びていては炎を宿すことなど出来はしないのだ。
タリウェンの言いたいことを正確に読み取ったのだろう。
アルスレッドは傍らの枯れ枝の山に手をのばし、一本を取ると、先ほどのタリウェンと同じくひゅん、と鋭い振りで枝から水滴を払った。
そうして、タリウェンを振り返る。
「こうか？」
「いい筋だが、少し惜しい」
タリウェンの答えに、明らかに不満を覚えた様子のディエーンの王子は、なんと次の瞬間、けしかけたタリウェンさえ想像もしていなかった行動に出た。
脇に摘んであった枯れ枝を数本、むんずと摑んだかと思ったら、次の瞬間にはタリウェンに向かって投げつけてきたのである。
同時に告げられた台詞が、ふるっていた。
「そんなに偉そうに言うのなら、貴様が手本を見せろ！　それで焚き火を熾して見せろ！　言いたくはないが……本当に言いたくはないが、わたしは寒いんだ！　どうにかできるのなら、

おまえがどうにかしろ！」

前半部分はともかく、後半部分は……なにかが切れたとしか思えない言葉の羅列だ。

同時に感じた——これは本音だと。

（寒いか……そうか、寒いのか）

自分も同じだが、アルスレッドは全身濡れそぼっている。

これでもかというほどに着重ねたディエーンの衣装は容赦なく彼から体温を奪っているに違いないのだ。

それは自分も似たようなもので、早々に暖を取らねば体調を崩すのは目に見えている。

せっかくだから、すでに凍えて動きの鈍くなっているらしい敵の総大将をさっさと片付けた後、彼の集めた枯れ枝の水気を払って火を熾す——という考えが浮かばなかったわけではないが、タリウェンにとって、それはあまり好ましい選択肢とは言い難かったこともあり……戦時にありながら、決して褒められないだろう道を彼は選んだ。

（……まあ、非常事態ということで……）

少しばかりの悪戯心を交えて。

「……ただで？」

相手はディエーンの王子だ——すぐさま財布なり装飾品なりを投げ出してくる可能性は高か

ったが、目の前の相手はもしかしたら違うなにかを差し出してくるかもしれない……そんなわずかな期待と共に口にした言葉に、返ってきたのは。

ぱすん、とタリウェンの胸を叩いたのは、掌ほどの大きさの革袋だった。

重くはない。

中身はなにかと覗いてみて驚いた。

そこには乾飯や乾パン、干し肉が入っていたのだ。

行軍中の兵士に配られる携行食糧だ。

相手はディエーンの王子であるはずだ。今回の戦における最高責任者であるはずだ……だから、一般の兵士と同じものを携帯しているなどとは想像もしていなかった。

それだけに、驚きは大きかった。

いや、しかし、それよりなにより。

戦場の兵士にとっては命綱であるそれを第一に重要なものと認識した上で投げつけてきたアルスレッドという王子に興味を惹かれた。

「なんだ、不足か？」

反応しないタリウェンに焦れたように声をかけてきた年少の王子に——命綱をあっさり敵に寄越すなど愚かしいにもほどがあるという思いを抱くのと同時に。

強烈な……奔流にも似た関心が向かうのを、タリウェンは抑えることができなかった。

「いや」

答える声は掠れていたかもしれない。

タリウェンはすでに確信しつつあった。

この偶然の出会いが、これまで自分が想像することさえなかった何かを――あるいは未来をもたらすであろうことを。

「充分だ」

充分すぎる。

火を熾す代価に、命そのものと言っても差し支えない代価を差し出してきた敵の総大将を前に、勿論警戒と緊張を手放すわけにはいかなかったが、それでも。

タリウェンはこみ上げてくる笑いを抑え込むことはできなかった。

後に『奇跡の三日間』と呼ばれる出来事は、実はこんな風に始まったのである。

マギル・レヴィン著『傭兵と王』第一稿より抜粋

「知ってます！」

ナルレイシアの声は黄色い悲鳴にどこまでも近かった。

「読みました！　大好きです、マギル・レヴィンの『傭兵と王』！　その後、土砂崩れが起こってふたり、洞窟のなかに閉じこめられて、互いに協力して脱出口を捜すんですよね！　それに結局三日かかって、ようやく外に出られた時には、ふたりは篤い友情で結ばれて……って」

そこまで夢中で主張していたナルレイシアだが、ふと気付くものがあったのだろう。

「うん？」

と、傍目には大変愛らしい仕草で首をかしげた。

場所は白鷺館――厄介で途方もないマルシアス家の説明を受けていたはずだったのが、なぜか途中で話す相手がガスカールからファティ・リンシャに交代し、しかも話題が彼女の大好きな作家の、しかも好みとしてはベストスリーに入る勢いの作品の内容に話題が移ってしまったとあっては、彼女の意識の脱線ぶりを責めるのは酷というものだろう。

しかし、ナルレイシアは頭のいい少女だった。

いや、勘が尋常でなく鋭い少女、と言うべきか。

「あー、もしかして『傭兵と王』って、完全架空の国の物語って形で描かれているものの、本

当は実話だったんですか？」

そして、話の流れから考えて、それはもしかするとディエーンに寝返……もとい膝を折ったというマルシアス家の当主を描いたものだったのか……。

（だけど、なぜわざわざ架空の国の話に仕立てる必要が……？）

マギル・レヴィンはフィクションだけを書く作家ではない。

実録作品も少なくはなく、そのほとんどが研究者を含めた専門家たちに絶賛されており、一部では資料として扱われてさえいる。

そんなマギル・レヴィンがなぜ、『傭兵と王』に関してだけは、実話をフィクションとして発表しなければならなかったのか……？

ナルレイシアの疑問に答えてくれたのは、銀髪も麗しい初老の女性――ファティ・リンシャだった。

「第一稿では実名だったのよ……ただ、時代がエルスース王朝のころでしたからね、前王朝時代にこんなドラマがありました、と触れ回るような真似はさすがにできなかったようなのよ。じゃあ、ほとぼりが冷めたころにと思ったらしいのだけれど、そうこうしている内に今度は次代候補に挙がったマルシアス家のご子息が暗殺された後、結局アマンシールが選ばれて、ファラスースに王家が交代してしまって……それで、このまま待っていたらいつまで経っても発表

できそうにないと開き直った結果、完全な物語として刊行することにしたという話ね」
「……そうだったんですか……」
ついうっかりとその説明に納得しかけたナルレイシアだが、ある一点において引っかかりを覚えた。
（あれ？　エルスース王朝も確か二世紀は続いたはずよね……？　いやいや、交代間近な時期だったと考えればおかしくはない……けど。でもほとぼりが冷めたころに、とか、そうこうしている内に、とか……なんか、時間感覚が異様に長いような……）
しかも、ファティ・リンシャの口調だ。
まるでマギル・レヴィン本人を見知っているかのような――。
（それって、まさか――）
本の虫であるナルレイシアにとって、マギル・レヴィンは大好物……もとい、好きな著者第一位に君臨しつづける大作家である。
著作の数といい質といい、裏切られたことがないという、とんでもなく得難く偉大な著作製造機……ではない、制作者なのだ。
だというのに、その素性は完全なる謎に包まれている。
そのせいか、実に様々な推測が流れているのだが、そのなかでも有力とされる説がふたつば

かりある。

ひとつは、マギル・レヴィンとは複数の著作者によって構成される集団の名称ではないか、さらにその集団は代替わりをしつつ存続し続けているのではないのか、というものだ。

作品の発表時期が、明らかにひとりの人間が書いたというには無理のあるばらつきを見せるため、最有力視されている説なのだ。

処女作が三百年近く前に出版された事実を思えば、他の可能性は考えられない——というのが、この説を主張する者たちの言い分だ。

ところが、根強くこの説に追いすがる勢いの第二説がある。

マギル・レヴィンとは、天と地の狭間である『空』を支える柱神の誰かが実名を隠し、実際に目にしてきたさまざまな出来事を書き記してきた際に用いた筆名ではないのかというのがそれである。

マギル・レヴィンの処女作の刊行は正確には二百五十八年前——ディエーンの王朝の寿命がほぼ二世紀ということから算出しても、マギル・レヴィンが柱神であるには寿命が長すぎるという主張は勿論あるわけだが……しかしながらナルレイシアは特例というか例外的な長寿な柱神なるものの存在を知ってしまった。

ファティ・リンシャ——正式名をリンシィア・セレナイダ・ファヴァイナという外見こそ初

老の女性である銀髪の貴婦人は、平均寿命二世紀強と言われる柱神の常識を大きく打ち破る存在であった。

彼女自身、柱神の血を引く身であるというから、多少長命であってもおかしくはないが、しかし、すでに五百有余年を生きていると聞いては、覚えず「……妖怪？」と呟きたくもなると言うものだ。

そんな存在が実際に存在するのだ。

しかも、先ほどのファティ・リンシャ本人の発言。

まるで、マギル・レヴィンが『傭兵と王』の第一稿を書き上げたころを見知っていたかのような言い回し。

（まさか……まさか！）

どきどきする心臓を抑えながら、ナルレイシアは決死の覚悟で問いかけた。

「マギル・レヴィンの正体って、やっぱり柱神さまだったんですか!?　でもって、それがまさか……」

期待に脈打つナルレイシアの高まる鼓動は――あっさりと否定された。

「わたくしじゃありませんよ」

嘘の欠片も入り込む余地もない宣言に、ナルレイシアは――付け加えるならスカルトードも

だった——がくんと肩を落とした。

ふたりとも、本筋から外れた部分で夢中になっていることを気づいていない。

気づかせてくれたのは——ガスカールだった。

正確に言うなら、彼のキレた怒鳴り声、だ。

「お前ら！　どこまで本題から外れる気だ!?　話していた内容はマルシアス家のことだったろうが！」

（あ、そういえばそうだった……）

と、暢気な感想を抱いた者、実にその場に居合わせた五人中四人という高確率。

好奇心という名の誘惑にどこまでも弱いナルレイシアは、もしかしたら選定者としての資質からは最も外れた存在なのかもしれなかった。

居心地悪く視線を彷徨わせる少女の前で、黒髪紫瞳の青年公爵は、それはそれはあからさまに「呆れた」との意をこめたため息をこぼして見せたのである……。

7

「そもそもの元凶は、アルスレッド陛下がマルシアス侯爵になったタリウェン卿に与えられた誓書なのよね」

ファティ・リンシャは、苦虫を噛み潰したような顔をした養い児とは裏腹に、実に楽しげに言い出した。

「誓書……？」

なんだろうと小首をかしげるナルレイシアに、銀の老婦人はにこにこと答えた。

「ええ。『傭兵と王』にも出てきたでしょう？」

先ほど話題に出たばかりの小説のタイトルに、ナルレイシアはその内容を記憶から引っ張り出した。

（誓書……誓書、ねえ……。そんなものが出てきた展開があったかしらん？　他愛のない賭け事をしてるシーンはよくあったけれど……）

と、そこまで考えたとき、ふとひとつのエピソードが浮かんだ。

「あの……もしかして、侯爵になって王宮に伺候するたびに、古参の貴族たちにねちねち厭味言われるのにキレて、もう来るものかって国王本人に怒鳴りつけたっていう……」

あれですか？

いや、しかしさすがにそれはないだろうというナルレイシアの思いを、しかしファティ・リンシャはあっさりと裏切ってくれた。

「そうよ。その後、ふたりで賭けをしたでしょう？　侯爵が勝ったら気の向くときだけ出向けばいいという誓書をもらうって。逆に王が勝ったら、王が望むときに好きなだけお忍びに連れ出せって。作中では結果は伏せてありましたけどね」

ふふふ、と綺麗に笑う老婦人に、黒髪の公爵が相変わらずの苦り切った顔で「笑い事じゃありません」と文句を言うが、その心に届いているようには見えなかった。

「……あのふざけた賭けも実話だったんですか。それで侯爵が勝ったんですか……」

歴史の秘められた真実をひとつ知ることになった少女は、しかしあまり嬉しくはなかった。

「そう、それでアルスレッド陛下はマルシアス侯爵に、文字通り『気が向いたときだけ伺候すればいい』という、前代未聞の誓書をしかも正式にお与えになったのよ」

ファティ・リンシャの説明に、ナルレイシアは呆れてものも言えなかった。

（確かそのときの賭けの内容って、次に部屋に入ってくるのが女性か男性か当てるってやつだったような……ふ、ふざけてるっっ！）

「……それだけじゃない」

と、暗く重い声で口を挟んできたのはガスカールだった。

「いかなる者も侯爵に伺候を強制することは許さぬとも明記されている……ディエーン王国が存続する限りとの条件付きでな！　さらには、この約定が破られた場合、マルシアス家は爵位と領土は安堵されたまま、ディエーンの臣籍を返上する権利まで約束するとあるんだ！　アルスレッド陛下はいったいなにを考えていたんだ！」

よほど腹に据えかねていたのだろう、ガスカールの声は怨嗟に満ちていた。

……確かに、聞けば聞くだけとんでもない約定である。

（どれだけ仲がよかったか知れないけど、臣下になった友人に、気に入らないことがあったら土地も爵位もそのままで自由になっていいよ、なんて約束する王様がどこにいるのよ……）

もっとも、決してそのようなことは起こらないと確信していたからこそ、大まじめにそんな文書を作ったのかも知れないが。

どちらにせよ、『傭兵と王』のモデルとなったふたりは、かなりとんでもない人物であったのは間違いない。

「……でも、それはウクルルス王家のころのことでしょう？　王家が交代したらそんな約定は無効なんじゃ……？」

そもそも存在自体が冗談のようなものなのだから――と、言いかけた彼女に、今度はスカルトードが苦笑混じりに説明を始めた。

「ところがそうはいかない事情がありましてね。侯爵はよほどうんざりしてたんでしょうね、どうせなら、未来永劫破棄されない証をつけろと言い出したそうです。それに応じる陛下も陛下ですが……この約定の証人を、当時の柱神さまにお願いされたんです。しかもその方がおふたりに負けず劣らずの面白がり屋だったそうで……」

「何事にも全力を傾けるひとでねえ……遊ぶのも全力で、こだわるのも全力でというのがモットーで。結果として、彼は証人を引き受けた上に、さらに『我が半身たる【貴神の午睡】が存在する限り、この約定が消えることなし』という一文まで添えたというわけ」

どうりや知己だったらしいファティ・リンシャが結んだ内容は、はっきり言って『現実的にあり得ない』代物だった。

……ディエーン王国は、今も立派に存続中である。

……神宝【貴神の午睡】は、いまもきらきらしく当代柱神アマンシールの身を飾っている。

「……つまり、王家がいくら交代しようと、その約定は有効ってわけですか……」

それで、かれこれ四百年、本気で王宮に顔を出さないマルシアス侯爵――。

（すごすぎる……）

との感想を抱くのは、なにもナルレイシアばかりではないだろう。

しかし、引っかかるものがないでもない。

「あれ？　でも、それってディエーン側がマルシアス家に伺候を強制した場合の話ですよね？　マルシアス家が王家に牙を剝いたりした場合はその限りじゃありませんよね？　エルスース王家がウクルルス家と交代したとき、マルシアス侯爵家はウクルルス家について戦ったわけではないんですか？」

そうであれば、戦いの結果が王家の交代である以上、マルシアス家は敗者となったのではあるまいか。

自らに忠誠を誓わぬ敗者を、エルスースの初代国王は、なぜ処断しなかったのだろう？

ナルレイシアの覚えた疑問に、ガスカールがため息混じりに答える。

「マルシアスはその内乱に関与していないんだ。国境を接した当時の隣国の侵攻を受けて、その戦いに集中していた。エルスース家は……言い方は悪いが、その隙に乗じてウクルルス家を滅ぼして玉座についた」

「……狡い」

彼女の正直な感想に、誰も反論しなかった。

「……まあ、それでもエルスース家にとって、マルシアスは不安の種だ。出来れば隣国との戦で疲弊してくれたら、そこを突いて……と思わなくもなかっただろうが――生憎というか、なんというか……」

「マーシャス一族の戦闘能力は他の追随を許しませんものねえ。領地の安泰を約束されたからと言って、代々の侯爵が鍛錬を怠ることはなかったということでしょう。その折の戦いも、時間こそ多少かかりはしたものの、ほとんど無傷の状態で勝利を得たという話です。そんなマルシアス家にわざわざちょっかいをかける気には、エルスース家もなれなかったでしょうね。下手をすれば返り討ちにあう」

ガスカールと違い、他国人であるスカルトードの口調は楽しげである。

対岸の火事は――というやつだろうか、とナルレイシアはふっと思った。

そんな友人に、ちらりとイヤそうな視線を投じた後、ガスカールが再び口を開いた。

「まあ、そういうわけで、エルスース家としては早期にマルシアス家をどうこうする考えは捨てたようだ。だが機会さえあれば、とは思っていただろうな。当然、それは侯爵にも伝わったようで、彼らは実に注意深く振る舞ったらしい。王宮に伺候しなかったのも、恭順するつもりがないというのはもちろんあっただろうが、わざわざ出向いて仕掛ける口実を作らせないた

めというのが大きかったのだろう。そして、ファラスース家との交代劇では、ファラスース家は玉座を得る戦いにあって、少なからぬ傷を負っていた。中立を守ったマルシアス家をどうこうできる状態でもなく、またその理由もなかった。マルシアス家の態度も以前と変わらなかったしな」

そうして、両者の関係は複雑なものを孕みつつも現在までつづいているわけだ。

長く複雑な説明をそう括って、ガスカールは改めてため息をついた。

「わかったか？」

問われてナルレイシアは即座にうなずいた。

とても否と答えられる空気ではなかった――実際、内容は理解できるものであったから、波風をたてる必要もなかった。

しかし、だ。

ここでひとつ疑問が生じた。

「マルシアス家が複雑な立場にあるってことはわかったんだけれど……その、ウォルセンさんがマルシアス家縁のひとかもしれないってことが、どう問題になるのかがわかんない」

その瞬間の、ガスカールの変貌ぶりを、ナルレイシアは長いこと忘れられなかった。

ぐったり疲れ果てた顔をしていた青年は、鬼相とはこういうものかと思わせる凄まじいもの

に変えて彼女を怒鳴りつけたのである。

「この猿娘！　貴様には考える頭がないのか！」

本気の本気で言われているのが伝わってきて、ナルレイシアはさすがに傷ついた。

つまるところ、マルシアス家は大きくなりすぎたのだというのが、スカルトードによる説明だった。

二度の内戦をほぼ無傷でやり過ごし、変わらぬ領土と戦力を保ちながら、一方で独自の人脈を広げ、産業を興し、その流通ルートを築き上げた現在のマルシアス家はすでに一侯爵家として扱えるものではないのだ、と。

その力はすでに小国並であるのだと。

「はっきり言えば、ディエーンにとってはマルシアス家はなくては困る存在であるというのに、マルシアス家にとってディエーンは必ずしも必要不可欠というわけではない、と」

ガスカールの口からは決して出ない――出せない――であろう言葉を、スカルトードはけろりとした顔で口にした。

「さあ、そこで問題です。最早小国並に力を持っている大貴族に縁のある人物が、新たな神宝の半身候補に選ばれました。その家はどう感じるでしょう？　……というあたりを、カールは貴方に言いたいのですよ、ヴィル・ダカール」

簡潔でわかりやすいスカルトードの説明を受けてようやく「ああ、そういうことか」と得心のいったナルレイシアである。

が、だからといって、なにがどうとも言えない。

「それで、問題の在処はスカーさんのおかげで理解できたけど、その上でガスカール、あなたはなにを言いたいわけ？」

尋ねた彼女に、黒髪の青年は呆れたように応じた。

「そこまでわかって、なぜわからない？　マルシアス家のことを知った上で、お前は本当にその見つけた男とやらを柱神候補に選ぶつもりなのかときいているんだ」

（ああ、やっぱり……）

予想通りの問いを投げられ、ナルレイシアはこっそりとため息を洩らした。

ひとりめの柱神見極めの際、図らずもディエーン中枢近くの問題に近づかざるを得なかったこともあり、政治事情にも無関心ではすまされなくなった彼女であるが、元々は――大商会の社主の娘とはいえ――一般市民なのだ。

餅は餅屋に是非お任せしておきたいというのが本音である。

さらに、だ。高位神官から聞かされて、『選定者』の務めにおける注意点のこともあるから素直にガスカールの望む答えを返すわけにはいかなかった。

選定者の務めとは、あくまで神宝が半身と選んだ相手を見極めること――そこに政治的な判断が混じってはいけないのだ。

混ぜて判断を歪めたとき、神罰はすぐに選定者に下る。

すなわち死――だ。

「……波風立てないために、わたしに神罰覚悟で別のひと選べっていうの!?」

食ってかかると、ガスカールは「そうは言ってない！」と反論してきた。

実際、彼にそんなつもりはないだろう――わかってはいても、政治事情を持ち出されるのは気分が悪い。

「もう少し慎重に振る舞うつもりはないのかと言っているだけだろう！　彼が翠唱子の半身だという決定的な証があるわけでもない……なのに、お前があくまで彼を追いかければ、どんな噂が広まることか――」

その行為が万が一噂にでもなって、マルシアス家が新たな柱神を立てたなどという噂が立ったらどうするつもりなのだ、と。

それが元で、マルシアス家が台頭し、新たな柱神の存在ゆえに味方する勢力がでてきた場合、どうするつもりなのかと――結果として国が二つに割れかねないことをわかった上で、ウォルセンを追い、説得するつもりなのかと。

「お前はディエーンの平安を乱しても平気なのか!?」

苛立ちを抑えきれぬ様子のガスカールの言葉に、言いたいことはわかるものの、かちんと来るのを止められない。

「そんなことは言ってないでしょう!? 第一、どうしてそうなるに違いないって前提になるわけ!? ウォルセンさんが、ディエーンに対して叛意を抱いてるとは限らないじゃない！」

これに対して、ガスカールは一応の同意を見せる。

「そうだな。しかし、マルシアス侯爵がどう思っているかはわからない。あの一族はディエーンのそれより格段に絆が深く、しかも当主の支配力が強い。柱神となる身であっても、生まれながらに叩きこまれた一族への忠誠心がある限り、侯爵の意向に逆らうことは難しいだろう……つまりは、侯爵の意向次第では、格好の旗印にされる可能性もあるということだ。そのあたりのことぐらいは、せめて把握しておくべきだろう？ このままお前が考えなしに直感頼みで新たな御柱を選ぶようなら、遠い将来、お前は稀代の悪女として歴史に名を残すことにもなりかねないと言ってるんだ！」

言葉は酷く乱暴だったが、怒りも露なガスカールのその『憤怒』は、ナルレイシアを気遣うがゆえのものだった。

そうと気付けば、怒りは自然小さく萎む。

しかし、ガスカールに気遣われることがあろうなどとはこれまで想像したことさえなかったものだから、ナルレイシアとしては困惑せずにはいられない。

「えーと、でも……？」

心配されているのだと、遅まきながらに理解は出来ても、ではこれからどうしたらいいのかなどわからない。

けれど、選定者としての務めは歪められない——それだけは、決して己に許してはならないことだという確信がある。

だから、そう叫んだ。

「でも……だけど！　ディエーンはもちろん大事だけど、都合が悪いからって、別のひとを認めるだなんてこと、絶対できないもの！」

興奮状態に陥ったナルレイシアの手に、そっと触れる者がいた。

アゼルフィアだった。

赤味の強い癖毛の少女は、心配するように彼女の名を呼んだ。

「ナルレイシアさん、落ち着いてください。そんなに興奮しないで……ほら、まだあの人が本当に翠唱子の半身候補かどうか、わからないわけですし。結局触らせる間もなく攫われちゃいましたから、あの人」

そんな彼女をスカルトードが援護した。

「そうですよ、ヴィル・ダカール。確認するためにも、彼の行方を捜す必要はありますが、カールの言うことも考慮に入れる必要があります。万一にも風聞になどならぬよう、細心の注意を払うべき問題ですよ、これは」

やさしく宥めるような声に、少しだけ落ち着きを取り戻し、ナルレイシアはこくりとうなずいた。

その様子に、ガスカールがなぜかぴくりと眉宇をひそめたのだが、彼女は別に気に留めなかった。

無自覚と鈍感が手を取り合うと、あるものもないものとして流されるといういい見本であるかもしれない。

「それはそうかもしれないけど……」

ふうぅぅ、と深い息を洩らしながら、ナルレイシアは先ほど気付いたばかりの事実を打ち明けることにした。

「でも、多分……というか十中八九の確率で、ウォルセンさんは候補どころか確定だと思うのよねぇ……」

疲れた声での告白に、その場の全員が息を呑んだ。

「……どういうこと、だ？」

地を這うような低い声で問うてきたガスカールに、ナルレイシアは無言で右手を挙げ、その手首を晒した。

正確には、その手首に巻いた神宝【翠唱子】の姿を。

ナルレイシアの手に渡った途端、輝きを増していた緑の石は以前と同じ鈍い色彩に戻っていた。銀の土台もうっすらと曇りがかり、はっきり言って見窄らしい。

「宿に戻ってから気付いたんだけど……多分、あの時だと思うのよね、ウォルセンさんが攫われる瞬間……」

中身、ウォルセンさんについて行っちゃったんだと思うの。

しんと静まりかえった室内――重苦しい沈黙を最初に破った勇者は、このなかで一番翠唱子に拘りを抱いている少女だった。

「中身って、翠唱子の意志とか力とか……そういうものですか？」

こっくん、とうなずくもうひとりの少女。

「多分、そういうもの。【黄昏の黄金】のときはね、ファティ・リンシャとアマンシールさまに中身の一部を分けてもらったんだけど……神宝が自分で飛び出すとは思わなかったわ。もっとも、本体ごと飛びつかれてたら、わたしも一緒に誘拐されてたのかしら……？　ああ、でもあの男なら、邪魔だって途中でわたしだけ放り出してたかもしれないから、中身だけついて行ってくれたのはよかったのかしらね」

その声は、どこか虚ろだ。

そうして、第二の勇者の声は、呆れの響きを強く宿したものとなった。

「……それは確かにもう、候補どころの話ではありませんねぇ……」

四つの深いため息がこぼれ落ちたのはほぼ同時のことだった――。

8

ジャッ、とカーテンが開く音につづき、ガシャガシャと固い音が聞こえたと思った次の瞬間、瞼ごしに光を感じた。

「ん……」

目覚めを促す朝の光に、しかしナルレイシアは顔を顰めて抵抗した。

昨夜は結局うまい打開策が浮かばず、明け方近くまで眠れなかったのだ。

体内時計が確かなら、恐らく眠れたのは一刻半というところ——夏の朝は早いから、光はすでにかなり強い。

起きろ、起きろと催促されているようなものだ。

が、いくら促されようと、眠いものは眠いのだ。寝足りないのだ。

(誰よ、カーテンばかりか鎧戸まで開けたの!? わたしはまだ眠るんだっての!)

要らぬお節介をしてくれた相手を呪いながら、彼女は夏仕様の薄手の掛け布団を引っ張り上

げて光を遮った。
　そのまま寝返りを打って、窓に背を向ける――取りあえず、これで光を感じずにすむ、と思ったのだが……お節介な『誰か』は、それを許してはくれなかった。
「起きてください」
　アゼルフィアの声だ。
「んー、アゼルフィア、お願いもうちょっと……」
　と、言ったつもりのナルレイシアだが、実際にはムニャムニャとした意味不明語が洩れたばかり。
「駄目ですよ、ナルレイシアさん。昨日なかなか寝付けなかったのは知ってますけど」
　困ったように、しかし断固として起こすつもりらしいアゼルフィアに、ナルレイシアは情けない声で懇願した。
「それがわかってるのなら……お願い、ほんとにもうちょっとだけ……」
　眠りの世界へ舞い戻る気満々な彼女に、しかし癖毛の少女は厳しかった。
「駄目ったら駄目です！　起きてください！　お客さまがいらしてるんですから！」
　なるほど、確かにそれは譲れない理由になるだろう――とはわかったが。
（客ぅ？　こんな朝っぱらから？　どんな礼儀知らずよ!?）

「……んなの、こんな時刻に来る方が悪いんじゃない……あとちょっとだけ……」

本当は待たせておけばいい、と思ったのだが、さすがにそれはどうかとも思うため、起きることを前提としたわずかな睡眠時間確保を狙っての彼女のこの台詞に、しかし返ってきたのは――。

「あ、あの、ちょっと……！」

なにやら慌てたようなアゼルフィアの声が聞こえた、すぐ後。

「やあ、久しいね、黄金の小鳥姫」

という、とんでもない美声による呼びかけが耳に飛び込んでくる。

一瞬脳裏が真っ白になった。

（おうごんのことりひめ……？）

なんだ、それは。

なんなのだ、この鳥肌の立つような気障で恥ずかしい呼びかけは!?

真っ白になった頭だが、微かな記憶の引っかかりを訴えてくる。

（この声、この恥ずかしい呼びかけ……恐ろしいことに、初めて聞くものでは……ないような気が……気が）

どこでだったか、誰であったか――までははまだ思い出せないが、確かに初めてのものではな

い。

そう気付いた瞬間、意識は凄まじい勢いで覚醒に向かったのだが、声の主による第二の口撃、

――相手にそのような意図はないのだが、受けたほうの精神的ダメージは甚大なものがある――をかわすには遅すぎた。

「そうやって寝穢く丸くなる姿も蓑虫のようで可愛らしいが、できれば美しい飴色の瞳を開いてみせてはもらえないかな？」

背筋がぞくぞくするような声で、こんな全身が痒くなるような言葉を告げられて――眠っていられるはずがなかった。

（お、思い出したぁっ！）

記憶の糸を辿り、引き寄せた正解を認識した瞬間、ナルレイシアは飛び起きた。

目はしっかりと声のした方を向いている。そうして、その人物の姿を目にした途端、彼女は大きな目をますます大きく瞠らずにはいられなかった。

ナルレイシアの寝室の扉のところ――。

人間離れした美貌の青年がにこやかな笑顔で立っていた。

その髪は緑がかった金、瞳は煙る灰緑――。

よくよく見慣れた人物のものである。

が。

ナルレイシアは知っていた。いま、ここにいるのが、自分が日頃同志として熱く書物について語り合っている青年――スカルトードではないことを。

ついでに言うなら、人間離れした美貌、というのもこの青年に関しては正しくない。彼はまさしく『人間ならざる美貌』の主なのだ。

なぜなら、スカルトードに瓜二つなこの青年は――。

「ネ、ネ、ネ……」

震える指先を、思わず相手に向けてしまうぐらい、ナルレイシアは動揺していた。

しかし、そんな彼女の心中など知らぬげに、相手は嬉しそうに朝の挨拶を口にするのだ。

「やあ、おはよう、小鳥姫。相変わらず可愛いね」

「ネ、ネ、ネイスリーズさまぁっっっ!?」

……そう、彼こそはスカルトードの大伯父にして、ディエーンの北西に位置するガライラ大公国を守る柱神ネイスリーズだった……。

七属ある色の中、紫属の柱神ネイスリーズとナルレイシアが誼を通じることとなったきっかけは、かれこれ一年近く前の真夏のロスタロイドで起こったことだった。

暴漢に襲われ、血を流して倒れている彼を見つけた彼女は、その瓜二つな――しかも、それはこの世にふたつあるとは到底思えぬ出来映えのものだった――容貌ゆえに、『本の虫同盟』の同志と信じて疑わず、その身を保護した。

目覚めた彼が記憶を失っており、自分のことを「黄金の小鳥姫」、自分以上に古くからのつきあいである女性に向かって「琥珀の女神」と呼びかけたときには、二人揃って粟立った互いの腕を見せ合わずにはいられなかったのだが。

しかし、そこまで同志――スカルトードとは違いすぎるものを目の当たりにしながら、それでもナルレイシアは別人だとは思えなかった。

理由は――前述にもあった通りの、彼の尋常でない……と言うより、すでに常軌を逸したと言っても過言ではない美貌にある。

こんなものが世にふたつあるなどとは、到底思えなかったため、記憶を失った青年をスカルトードだと認識していた彼女だったが、この世には、どれほどあり得ないと思えることであってもあり得ることがあるのだと――知ったのが、数日後の嵐の夜。

青年を襲った暴漢がらみの騒ぎが夜中に起こり、そうしてなんとか落ち着いたかと思った瞬

間、それまで『あり得ない！』と認識していた世界がひっくり返ったのだ。

『あんまり馬鹿な騒ぎ、起こさないでください、大伯父さま』

そう呼びかけるスカルトードの姿を認めた瞬間のことである。

鄙には稀どころか、世にも稀――いいや、奇跡としか言いようのない完璧な美貌がふたつ並んでいるのを目にしたときの衝撃は、とても言葉で言い尽くせるものではない。

筆舌に尽くしがたい衝撃とは、あのようなことを指すのだと、記憶を振り返る度にしみじみとそう思う。

そんな――。

そんな衝撃の映像を、だ。

よもやまさか二度と目にすることはあるまいと、そう信じていただけに、不意打ちを食らったナルレイシアのダメージは大きかった。

場所は言うまでもなくエアラン一二を誇る臼鷺館の最高級の客室――テーブルを囲んで、現在六人がお茶会という名の会議を繰り広げていた。

「わたくしが呼んだのよ」

脅威の美貌がふたつ並んでいることに、何ら衝撃も受けた様子もなく、銀髪の老婦人は優雅にティーカップを傾ける。

その右隣では脅威の瓜双子の片割れであるネイスリーズがにこにこ笑いながら「そうなんだよ」とうなずいている。

対して左隣に座っている黒髪の青年公爵はなぜか無言を守っている——事前に養い親である女性から、口を開くなとでも言われたのかもしれない。

その隣には、スカルトード——こちらは見るからに不機嫌そうに顔を歪めている。

そんな美貌の一団とほぼ正面から向き合う格好となった少女ふたりの内のひとり——ナルレイシアは隣のアゼルフィアにちらりと目を向け、ぴきりと凍り付いたかのように硬直している様子に心から同情していた。

朝、自分を起こしに来たとき、実はアゼルフィアはまだ『客人』の顔を見ていなかったのだという。

ただ、ファティ・リンシャから「お客様がおいでになったから、ナーシアを起こして来てくれるかしら？」と頼まれただけだったらしい。

だから……ナルレイシアの寝室の扉から、ネイスリーズが顔を覗かせた際、てっきりスカルトードだと思ったわけで……その旅装姿に多少の違和感は覚えはしたものの、それだけだったらしい。

……その後ろから同じ美貌がひょい、と現れるまでは。

（不意打ちであれ見たら、そりゃあ驚くわよねぇ……）

かつて体験済みのナルレイシアには、そのときのアゼルフィアの心境が手に取るようにわかるだけに、同情せずにはいられない。

おまけに、いまも――隣に並んでこそいないが――人外美貌がふたつ、同じ部屋に存在しているのだ……すぐに順応しろというのは無理な話だろう。

しかし、傍らの少女を気の毒がってばかりもいられない。

なぜ、突然ガライラにいるはずのネイスリーズがここに現れたのか――ここ数日の件と無関係とは思えず、挨拶もそこそこに理由を尋ねたところ、ファティ・リンシャの前述の台詞が返ってきたというわけだ。

「わざわざガライラから、ですか……？」

ガライラ大公国は、ディエーンの北西に位置する国である。

現在地であるエアランはディエーン南部――いかに柱神と言えど、気軽に呼び出せる距離ではない……と思ったのだが、これは即座に否定された。

「いいえ、ファエンからよ。言ってたでしょう、ファエンで久しぶりに集まることになったって」

……そうだった、とナルレイシアは思い出す。

そもそもこの旅は、ファティ・リンシャが友人たち――数十年から数百年に及ぶつきあいというあたり、柱神さまはスケールが違う――と旧交を温めるために、ファエンで集まることになったと言い出して始まったものなのだ。

決して、ナルレイシアの選定者としてのお務め第二弾が目的ではなかった……うっかり忘れかけていたのだが。

「はあ……」

しかし、エアランとファエンとの間に横たわる距離も、そう短いものではない。

（いったい、何のために……？　まさか、スカルトードさんとふたり並べて鑑賞したかっただけ、ということはないわよね……平時ならともかく）

銀髪の老婦人は、ナルレイシアの疑問に直接答えることはせず、少々意味不明な言葉を笑顔でつづける。

「きな臭い情報なら、このひとの得意範囲ですからね。平穏な日々を過ごすわたくしなどでは手に入らない話を色々と聞かせて貰おうと思って」

さらりと、さりげなくひどい言葉を口にするファティ・リンシャに、ネイスリーズが「ファティ・リンシャ……」と咎めるような声を上げた。

「人聞きの悪いことを仰らないでください。尽きせぬ知的好奇心を満たすべく、日々さまざま

な情報を敏感に取り入れているだけじゃありませんか。……まあ、情報網を広げている内に、外聞を憚るようなものが多く混じるようになったことは否定しませんが」

なんだろう、知的という言葉がひどくそぐわない内容のような気がするのは……。

そんな思いを抱いたのはナルレイシアだけではなかったらしく、世にも麗しい顔を勿体なくも顰めたスカルトードが冷ややかに言い切った。

「ただの野次馬根性……もしくは出歯亀でしょう」

その様子に、ナルレイシアは隣の少女の顔が引きつったのを認めた。

（まあ、この顔で口にしてほしい言葉じゃないわよねー）

自分たちが言うには気にならないが、スカルトードやネイスリーズから「野次馬」だとか「出歯亀」とかは……あまり聞きたくはない。

ほかにも気になる点がないでもなかったが、取りあえずナルレイシアはファティ・リンシャたちに会話を任せておくことにした。ここ数日来の騒ぎに無関係な話ではあり得ないという確信を抱いたからだ。

果たして、言葉遊びに興じている場合ではないと思ったのか、ネイスリーズが早速本題に入った。

「それで、マルシアス家の内情について知りたいとのことですが……正直、あまり多くはあり

ませんよ。ディエーンの中枢に近いエルスカーネ公爵が把握していないようなものがあるとは正直思えませんが」

それでもよろしければ――と前置きした柱神の青年に、ガスカールが真剣な面持ちで「お願いします」とうなずいた。

「正直、王家とマルシアス家の関係は微妙に過ぎて、却って我らには情報が入って来ないのです。入ってくるとしても、虚実入り乱れて選別が難しいという……」

「いらぬお節介を焼いてあげようとしたこともあるのだけれど、向こうは結界術師を抱えて秘密を隠しているものですからね。本当にお手上げの状態なのよ」

養い児に加勢する形で後をつづけたファティ・リンシャが、ため息とともに肩をすくめると、ネイスリーズは呆れたように「ははあ」と声を洩らした。

「それではあの家がここ数年分裂の危機に瀕していることもご存じでない？」

いきなりの爆弾発言である。

黙って聞いていようとの決意も吹き飛び、ナルレイシアは思わず叫んでいた。

「なんですか、それは!?」

しかし、驚いたのは彼女ばかりではなかった。

ガスカールが呆然とした顔で「本当ですか？」と尋ねる――彼が知らなかったのは、その顔

から明らかだった。

「こんなことで嘘をついてどうします。十年ほど前になりますか、あそこは分家から養子を迎えましてね。嫡子が病弱だったせいで、その子の補佐兼身代わりに引き取ったんじゃないかというのが当時の見方でしたが……」

「身代わり？」

意味がわからないと首を傾げるアゼルフィアに、ナルレイシアは小声で説明した。

「昔から病弱な子供のいる家では、その子供に降りかかる災厄を別の対象に向けるという意味で犬とか猫とか飼うことが多かったの。災厄というものは、その家で一番弱い者に向かうものだから、子供以上に弱い存在を作るってことでね。お呪いみたいなものよ」

そういう風習は珍しくはない——だが、人間の子供に降りかかる災厄を、別の子供に……というのは、穏やかではない。

「まあ、ふたりともすくすく育って何よりだとわたしなどは思いますがね、どうも子供たちが大きくなるにつれて、どちらの子を持ち上げるかで派閥が出来たみたいですよ。本家の血を受け継ぐ病弱な子供と、分家出身の健康な子供。どちらも優秀らしいですが、それだけなら病弱な跡継ぎと補佐の義弟というところで落ち着きそうなものですよね。そうならなかったということは、なにか隠された要因があるはずなんですが……ファティ・リンシャも仰ったように、

あの家は昔から東方の術師たちを使って情報を隠すのが上手いんですよねえ。それでも、全部が全部隠しきれるわけではありませんが」

「子供にしてみればいい迷惑ね。もっとも、相性というものがありますから、仲が悪いようであれば、無理に支え合う関係を押しつけられる方が迷惑かもしれないけれど」

呆れたように老婦人が言えば、ネイスリーズがまったくだと言わんばかりに首肯した。

「辞めた使用人が言うには、周囲の思惑はどうあれ、大変仲はよかったらしいです。それだけに可哀相ですね、三年ほど前からは、マルシアスの分家のあそこやらあそこやらが、秘密裏に物騒な仕事を請け合う人間を漁り始めましたからね」

物騒な仕事ってなんだろう――とは、ナルレイシアもアゼルフィアも口には出さなかった。怖い答えが返ってくるのはわかりきっている。

しかし、彼女たちのせっかくの判断は、同席しているふたりの青年によって台無しにされた。

「刺客の送り合いでも始めたんですか？」

と、スカルトードが直球で質問し。

「しかし、あの家は当主の決定が絶対のはず……侯爵はどちらを後継に据えるか、まだ決めかねていたのか……？」

自問するように首を傾げるのはガスカール。

一気に生々しく且つきな臭い方向に転がりだした話を聞きながら、ナルレイシアは内心頭を抱え込んだ。

（……刺客の送り合いって……ああ、ウォルセンさん、女装だろうとなんだろうとなりふり構ってられなかったわけだわ……）

錯覚ではなく、頭痛がした。

9

ちらりと視線を金髪の少女に向けながら、エルスカーネ公爵ガスカールは苦い思いを噛みしめた。

（厄介なことになった）

ナルレイシア・フォイリリル・ダカール――創世七神より選ばれた、この世界の『空』を支える柱神を見極める役目を帯びた少女は、ひとりめの柱神を見極める際にも大変な騒ぎを起こしてくれたものだが、この分ではふたりめもすんなりとは行きそうになかった。

ディエーンの柱神であるアマンシールから直々に彼女を守るよう言いつけられているガスカールとしては、この展開にため息を禁じ得ない。

（どこまで厄介事を引き寄せれば気が済むんだ……）

呆れるというより、最早疲労感のほうが強い。

本当に、見た目は極上――しかし中身は猿と認識している――のこの少女ときたら、穏便と

いう言葉を知っているのかどうか疑問に思うほど、騒ぎに関わるのが得意ときているのだから。

……本人が聞けば、「引き寄せてるわけでも、好きで巻き込まれてるわけでもない！」と力一杯主張するだろうが。

（よりにもよって……）

ディエーンにとって厄介極まりないマルシアス家縁（ゆかり）の相手が絡んでくるとは……あまりにも頭の痛いなりゆきである。

（おまけに、後継者争いが継続中、だと……？）

ネイスリーズがもたらした新たな情報は、この先に待つ危険の大きさを約束するものでしかなく、おかげできりきりとこめかみあたりが痛んだ。

つまるところ――証拠はないが――ナルレイシアが見いだしたという神宝翠唱子（しんぽうすいしょうし）の半身は、まず間違いなくマルシアス家の後継者候補の片割れであり、騒ぎの規模が拡大するのはもはや確定事項と言えた。

（事情（わけ）ありにも程度というものがあるだろう）

王家寄りの立場にあるガスカールにとって、今回の件は複雑にして厄介すぎるものだ。

かなうことなら空高く匙（さじ）を投げてしまいたいぐらいである。が、ナルレイシアがほぼ中心に

絡んでいる以上、そうするわけにもいかない。
どういうわけか、ナルレイシアはガスカールの周囲の人間――人外も含む――たちの好意を勝ち取っているからだ。
柱神であるアマンシールとファティ・リンシャに始まり、次期王太子と見なされている王子ウォルカード、数少ない友人のひとりであるスカルトードなどは『本の虫同盟』なるわけのわからない絆を主張しているし、その大伯父である柱神から向けられる好意も相当大きそうである。次期ディエーン柱神であるリオライーシャにいたっては、命の恩人だと言って懐きまくっている。
そんなわけだから、ガスカールはここで「面倒を見切れない」と突き放すわけにはいかないのだ――まず確実に彼らに責め詰られることを覚悟の上でもなければ。
（本当に、厄介な……）
ため息を押し殺しながら、ガスカールは再度少女に目を向けた。
気付いたらしい少女が目線で「なに？」と問うてくる。
さんざん世間知らずだのもの知らずだと――関係ないが礼儀知らずとも罵ったこともある――貶してきただけに、彼女にものを尋ねるのは気が進まなかったが、質問内容を考えると、答えられるのは彼女だけであるから、仕方なく口を開く。

「……どう考えても厄介な相手だとしか思えないが……まあ、翠唱子の本体がこちらにある限り、捜しだして会う必要があるのはわかるんだが……」

我ながら歯切れが悪い。

当然のことながら、ナルレイシアに真意は伝わらない。

「会うだけじゃだめよ。なんとしても柱神さまになることをうなずいていただかないと！」

ぐっとこぶしを握りしめて、ナルレイシアが叫んだ。

即答の上、力説――駄目だ、わかっていないと、ガスカールはがっくりきた。

彼女の決意もわからないではない。なにしろ彼女は今回も含めてあと三人、柱神を見極める役目が残っているのだ。

読書三昧の日々こそ至福と言い切る彼女のことだ、選定者としての務めなど、可能な限りさくさく終わらせたいに違いない。

（だが、それにしたって問題の質と規模が大きすぎるだろうが！）

さっさと片付けたいからの一言で押し切ってほしくはない。

「……そのことなんだがな。さ……ナルレイシア」

呼びかけた瞬間、少女が驚きに目を瞠った。

「猿娘と呼びかけたでしょう……でも、珍しく名前で呼んだってことは、なにか言いにくいけ

ど言いたいことでもあるわけ？」

図星である――が、なにもこんなところだけ勘を働かすこともなかろうにと思わないでもないガスカールだった。

「ああ。お前にとっては遠回りになる、気の進まないことだろうが……何分にも事情が複雑すぎる。件の男……いや、確定候補の方に、なんとか辞退してもらえるように働きかけることはできないだろうか？」

要らぬ波風を起こさないためには、それが一番のように思えた。

だが、しかし――。

「あ、それ駄目。無理。却下」

またしても、ナルレイシアが即答した。

しかも『駄目』『無理』『却下』と念入りな拒みようだ。

ガスカールはさすがに苛立ちを覚えた。

（そんなに本が恋しいか!?）

国家の安定より本を選ぶと言っているようにしか聞こえなかったのは、なにもガスカールばかりではあるまい。

「ディエーンが割れてもいいと？　少しは周囲のことを考えようとは思わないのか!?」

きつい口調でそう告げると、ナルレイシアは蜂蜜色の瞳に怒りを滾らせて言い返してきた。

「自分の事情ばかり考えてるのはどっちよ!? 勝手にひとのこと決めつけないでよね。いーい？ あのね、神宝に選ばれた人間には拒否権がないの！ ウォルセンさんはもう選ばれちゃったも同然だから、なんとしても受け入れてもらわないといけないの！ そうしないと、逆に彼が危険に晒されるの！」

凄まじい剣幕だった。

しかし、その内容にガスカールは素直にうなずけなかった。

「拒否権がない……？ 馬鹿な……神ではなく人間としての生を選んだ柱神候補の話はいくつも……」

残されているではないか——そう続けようとしたガスカールの視界の隅で、ファティ・リンシャが物思わしげなため息をこぼした。

「カール。ナーシアの言葉は正しいわ。あなたが聞いた話というのは暗黒時代以前の逸話よ。半数近くが失われ、力も弱まった神宝には、かつてに比べ格段に不安定になっているの。だから選ばれた人間に辞退という選択肢は許されていない……政治に関わることも多いあなただから、なるべく教えたくはなかったのだけれど……選ばれた側が辞退する唯一の方法は、生を終えること。死ぬことでしか、人間ではいられないの」

発言者がナルレイシアであったなら、ガスカールは素直に信じることはできなかっただろう——だが、五百年以上の時を生きてきた柱神の言葉には、疑問を覚えることさえできない。

そして瞬時に理解する——彼女が「教えたくない」と言ったその理由を。

神宝に半身として選ばれた人間には、死ぬ以外に拒む術はない。それは翻れば神宝に選ばれた人間が死ねば、次の半身が選ばれるということだ。

政治に関わる者の間に、この事実が広く——いや、一部にでも流れれば、人間の都合による柱神選びが再び横行することになる……過去、その愚かしさゆえに、かけがえのない神宝の半数近くを喪った事実も忘れ、ひとびとは再び同じ罪を犯すだろう。

ガスカールが実践するつもりがなくとも、ちらりと（では、その男が死ねば……）と考えずにはいられなかったように。

確かに、これは隠されるべき秘事だ、と思った。

「カール」

静かな声が彼を呼ぶ。

深い響きを宿すそれに、ガスカールは「はい」と応じた。

ファティ・リンシャが、きつくはないが強い意志をこめた瞳を向けてくる。

「カール、あなたがどれほどディエーンを愛しているかはわかっているつもりだけれど、その

事情を選定者たるナルレイシアに押しつけることだけは許しません。たとえナーシアがディエーンに生まれようと、その平安を心から祈っておろうと、神宝の選択は絶対であり、彼女はそれにこそ従うべき役目を創世七神より授かったのです。それを惑わす行為は、わたくしが許しません。人間が欲で柱神を求めた結果、暗黒時代が訪れ、神宝の半数近くが喪われ、喪われこそしなかったものの、少なくはない神宝が最早一切の歪みに耐えきれぬまでに追い詰められました。現存する神宝は、ひたすらに半身を望むばかり……選定者は、その神宝の声を拾い上げる稀有な存在なのです。そんな彼女の意識を、カール、あなたの都合で歪めようと言うのなら……それは決して看過できぬことだと、ここで宣言いたしますよ」

淡々とした口調にも拘わらず、そこには紛れもない神としての力と意志が溢れていた。

事と次第によっては、養い児と言えど許しはしないと言外に言い切られ、ガスカールは一瞬縛られたように動けなくなった。

ファティ・リンシャは、本気だった。

「わかりました。先ほどのことについても、決して他言はしないと誓いましょう」

心からの言葉を口に乗せ、彼はアゼルフィアに目を向けた。

「アゼルフィア。君もだ、いいな？」

決して洩れてはならぬ秘密を思いもかけず背負うこととなった少女は、なにを指してのこと

かときょとんとした顔になったが、すぐに理解したらしく、こくこくとうなずいた。
問題は巨大化の一途をたどり、先行きの不安やいや増すばかり――。
（本当に、匙が投げられるものならば……）
できないことは重々承知で、それでも彼はそう思わずにはいられなかった。
どんなに厄介で面倒ではた迷惑でも、金色のふたつ尻尾と蜂蜜色の瞳を持つ『匙』から手を引くという選択肢を、彼はすでに放棄していた――無自覚のままに。

「きゃあぁぁっ！」
絹を裂く少女の悲鳴が白鷺館を揺らした。
「な、なにをなさるんですかっ！　ネイスリーズさまっ!?」
その場にいなければ、いったい何事か――と不穏な考えが脳裏に過ぎりそうな台詞の発言者である少女は、真っ赤な顔をして件の柱神を見つめていた。
「なにって――」
悪びれることなく、恍惚感すら誘う笑顔で答える人外美貌の青年は、ナルレイシアの制止な

ど完全無視の状態で、彼女の左足に巻いてある包帯をほどき続ける。

因みに、椅子に座ったナルレイシアの足下に膝をついた格好で、その左手は彼女の左足のかかとを恭しく持ち上げてのことだったりする。

他人から見れば一幅の絵にも似たこの構図は、しかし跪かれている――よりにもよって柱神に！　――彼女には尋常ならざる精神的負担を強いていた。

「割れた爪の治療をしてあげようかと思って」

「治療なら自分でできます！　細かいところはアゼルフィアに頼めばやってもらえるしっ！　わざわざネイスリーズさまのお手を煩わせるまでのことは……」

ありませんから――と、力一杯主張した彼女だが、しかし相手は退いてくれない。

「でも、このままじゃあ歩けなくて不便だろう？　大丈夫、わたしの気を受ければ、治癒の速度が見る間に上がって、あっという間……は無理としても、二倍の速さで治るから」

だからおとなしくしなさい、と逆に言いくるめられてしまった。

それでも、どこから見ても完璧無比な美貌の青年――たとえ中身がどれほど変わっていたとしてもだ――に、素足を預けるというのは恥ずかしすぎる。

「え、えーっと……そういうことなら、ファティ・リンシャにお願いしたいかなぁとか思うわけなんですけど……」

せめてもの抵抗も、ネイスリーズの次の言葉であえなく玉砕。

「ファティ・リンシャにこんな格好させたと知れたら、黒髪くんの怒りが爆発するんじゃないのかな？」

正しい――その予測は限りなく高い確率で実現するだろう。

瞬時にそう判断できてしまい、結局諦めざるを得なくなったナルレイシアだった。

「ほんとは年頃の女の子に恥ずかしい思いをさせるつもりはないんだけどね、直に触ったのと手をかざしただけじゃ、歴然と治癒効果が違ってくるんだよねえ。小鳥姫には悪いけれど、明日には出立したいから、ちょっと我慢してくれないかな？」

何でもないことのように告げられた内容――特に後半部分――に、彼女は思わず「は？」と間抜けな声を上げた。

「出立って……どこにですか？」

ウォルセンを捜し出すことはすでにナルレイシアにとっては決定事項だが、その手段はというと全くのお手上げ状態なのだ。

「まさか、ウォルセンさんの居場所がわかったんですか!?」

勢い込んで尋ねた彼女に、ネイスリーズは「残念ながら」とかぶりを振った。

（そっか……そうよね、結界術師なんて西方社会じゃわけのわからない術師が絡んでるんだも

の、そう簡単に居場所がわかるわけないんだわ……）

当たり前のことなのに、落胆を覚えずにいられないのは、きっと一縷の希望をネイスリーズの言葉に見いだしたからだ。

小さく肩を落としたナルレイシアの耳に、ネイスリーズの柔らかな声が入ってくる。

「だが、手がかりがないわけじゃない……マルシアス家縁の者という決定的な証拠がある以上、そちらを当たればいいだけのことだよ」

こともなげにそう告げてくる柱神を、彼女はじぃっと見つめた。

「それってつまり、マルシアス家に真正面から乗り込むってことですか？」

さすがにそれは無謀無策に過ぎるのではないかとの思いを隠しきれない。

（大体、小国にも匹敵するような大貴族の……それも王様の呼び出しさえ無視できる御当主が、貴族でもない小娘に会ってくれるとは思えないんだけど……）

そんな彼女の心中は、目前の柱神にはお見通しだったらしい。

「大丈夫だよ、侯爵は絶対に会ってくれるはずだから」

にっこりと、自信満々の笑顔でネイスリーズは言い切った。

だって、ね――と、少し声をひそめて悪戯っぽい口調が語る内容は――。

聞いた瞬間、ナルレイシアは驚きのあまり「ええ!?」と叫んでしまった。

ネイスリーズはこう言ったのだ。

「平気だよ。侯爵に会いに行くのは選定者の女の子じゃなくて、マーシャスの女神……妙歌星（みょうかせい）ファタランテ縁の品を、彼女の血を引く末裔（まつえい）に届けに行く柱神、なんだから。ね？」

と――。

10

「行ってきます！」
鞄ひとつを手に、ナルレイシアは白鷺館の中庭で、簡潔な挨拶の言葉を口にした。
「行ってらっしゃい、気をつけてね」
にこやかに答えるのは銀髪の老婦人――現在前柱神中で第一位の長老と呼ばれるファティ・リンシャである。
「お気をつけて」
気遣うように告げて来るのは金髪の青年だ。
「……」
黒髪の青年は、結局言葉はなかったが、その紫の双眸に心配そうな光がたゆたっている。
（うわぁ、なんからしくないって言うか、そんな顔されると、これから本当に大変だーって言い切られてるような気分になるからやめてよねぇ！）

先行きの不安をつきつけられたようで、思わず顔を顰めると、相手は実に不本意そうに「なんだ、見送りに来てやったというのにそのイヤそうな顔は」とぶつくさこぼした。
その声が、いつもどおりの不機嫌なものだったことに、少しばかり安堵を覚える。
（そうよ、ガスカールはこうでないと……）
そう感じてしまう両者の関係が、客観的に見てどうなのかはとりあえず考えないことにした。
「ナルレイシアさん、忘れ物はありませんか？」
今回の同行者のひとりであるアゼルフィアが声をかけてくる。
彼女の荷物も鞄ひとつだ。
「うん、大丈夫。アゼルフィアこそ、中身はきちんと確かめた？」
「ばっちりです。元々荷物らしい荷物なんてありませんし」
はっきりした口調で答える少女の瞳はきらきらと期待に輝いている。
何に対する期待かといえば、ウォルセンが翠唱子を受け入れ、身につける瞬間への、だ。
ウォルセンが黒髪の結界術師に攫われた場面に居合わせた彼女は、ちらりと目にした柱神候補の青年の容貌に、非常な満足感を覚えたらしい。
『あの方が翠唱子の半身となられるんなら、もう大満足です！　いえっ、別に最初から文句な

んかつける気はありませんでしたけどっ！　それでも、それなりに希望はあったというか、目に楽しいお姿をしてらしたらいいなーぐらいの気持ちですけど。そういう意味で、あの方ならもう全然文句なしです！』

……自覚があるかどうかはわからないが、どうやら彼女は結構な面食いらしい。

（でも、そう言えば、柱神さまで目に楽しくないお姿の方って、お目にかかったことがないわ。もしかして、神宝も程度の差はあれ面食いなのかしらん？　それとも神宝に選ばれるような内面をお持ちの方は、それが自ずと外見に反映されていらっしゃるのだとか？）

そんなことを思いながら、ナルレイシアはちらりと目の前の青年を見た。

緑がかった金の髪は、朝日を受けてきらきらと輝き、シミひとつない白皙は、まるで自ら光を放っているかのよう。煙る灰緑色の双眸は、見つめられたら魂までも奪われそうな魅力に溢れている。

（……この方の場合、すでに内面がどうとかいう次元じゃないけど）

一度目にしたら脳裏に焼き付いて離れない人外美貌の柱神は、楽しげな笑顔でナルレイシアたちに手をさしのべる。

「では、そろそろ出発しようか。荷物はこちらに……小鳥姫、左足の調子はどうだい？　痛むようならもう一度気を吹き込んであげてもいいが」

純粋な親切心からの言葉だとはわかっていても、昨夜の衝撃を思い出すだに、再度味わいたいとは思えないナルレイシアは、ぷるぷるとかぶりを振った。
「い、いえ！　どうかお気遣いなく！　走ったりしなければ大丈夫なぐらいには回復しましたから！」
それは嘘ではない。
さすがは神さまというべきか、ネイスリーズに気を流し込んでもらった左足の割れた爪は、見る間に傷が塞がったのだ。
『表面だけで、中の傷は完全に塞がったわけじゃないから、無理は禁物だけどね』
との言葉の通り、飛んだり跳ねたりしたらずきりと痛むが、歩く分にはなんら支障がない……ただ、これから歩いて旅をするとなると、不安がないでもないのだが……。
「そう言えば、なんで中庭集合なんですか？」
出発するなら普通玄関ではなかろうか。
尋ねたナルレイシアに、ネイスリーズは悪戯を企む子供のような笑顔で答えた。
「んー？　ああ、車を呼んだからね」
「車？」
馬車だろうか――それなら尚更玄関のほうだと思うのだが。

同じ疑問を抱いたのだろう、アゼルフィアも首をかしげている。
驚きの声をあげたのはファティ・リンシャだった。
「まあ！　あの子に車をつけさせたのですか？　気位の高いあの子がよく承知しましたね」
その言葉にネイスリーズが苦笑を洩らした。
「若いお嬢さんをふたりお連れするのだからと言いましたから。まさか鞍も手綱もない背に、お嬢さんがたを横座りさせて移動はできませんでしょう？　まあ、ズボンを着用してもらうことも一応考えはしたんですが、それにしても、あれには少々邪魔なものがついておりますし」
と、彼がそう説明した瞬間のこと――。
ごうっ、と中庭の奥から突風が襲ってきた。
「え……!?」
「や、なに!?」
ナルレイシアとアゼルフィアが驚きに目を瞠ると、ファティ・リンシャが「まあまあ」とのんびりした様子でネイスリーズを見やった。
「邪魔なもの、だなんて……あの子が怒るのも無理はありませんよ。あんな美しいものを指して使う言葉ではありません」
「いや、別にそういう意味で言ったわけではないんですが。実質上の問題として、ですね。

と、わかったわかった。謝るからかまいたちは勘弁しておくれ。お嬢さんがたも驚いてるじゃないか」

軽く両手を上げ「降参」とつづけるネイスリーズの眼差しは、真っ直ぐに中庭の奥――なにもないはずの空間に注がれていた。

（ネイスリーズさま、いったい誰に向かって話してらっしゃるのかしら？）

わけがわからず、ますます首をかしげたナルレイシアたちの前で、美貌の柱神はすい、と右手を優雅に宙に舞わせた。

「ありがとう、風霊たち。目くらましはもういいよ」

ネイスリーズの言葉と同時に、さあっと風が動いた。

そして、なにもなかったはずの中庭に現れたのは――。

「うわ……」

「ええっっ!?　嘘!?」

少女ふたりの声がひっくり返る。

なぜなら、そこに突然出現したとしか思えなかった生き物は――その姿は。

青光りするしなやかにして強靭そうな優美な体軀。

雷光を放っているかのように、きらきらと輝く青銀の豊かなたてがみ。

そしてなにより目を奪う——青銀と青黒の二対の大きな翼。
伝説や神話にしか登場しないはずの幻獣がそこにいた——人間ふたりが乗れるぐらいの箱形の車を引いて！
「……雷馬？」
その夢のように優雅な姿に見とれながら呆然とつぶやいたナルレイシアは、しかし次の瞬間、猛烈ないたたまれなさを覚えた。
（あんなに美しいのに……あんなに綺麗な生き物にわたしたちが乗るための車を引かせるだなんて……ああ、美に対する冒瀆だわ！　雷馬に申し分けなさすぎるわ！）
孤高の王の風情を漂わせる雷馬に、箱形の車——似合わなさすぎて涙が出そうだ。
そんなナルレイシアの心の声が聞こえたかのように、雷馬がふと首を巡らせた。
視線が、合う。
そして、その深い紫の双眸に、一瞬笑みに似た光が過ぎったのを、ナルレイシアは確かに見た。
（気にするな、と言われたような気がしたわ……）
美しい上に寛容で優しい——これが人間の男性であったなら、女性が放ってはおかなかったに違いない。

ふうぅ、と思わずため息が洩れた。
「素敵ですねえ……」
素直な賞賛の声を上げた彼女に、しかしなぜか返って来たのはふたりの柱神の苦笑だった。
「ネイスリーズさま？　ファティ・リンシャ？」
なにかおかしなことでも言ったのだろうか？
心当たりのないナルレイシアはきょとんとしたのだが、意外にもその理由は隣の少女からもたらされた。
「ナルレイシアさんって、大物」
「は？」
目を瞠った彼女に、アゼルフィアは呆れたようにつづけた。
「普通、あれを見たら凍り付くか、魂抜かれちゃうか、どっちかだと思いますよ？　わたしだって、ナルレイシアさんの声が聞こえるまで頭真っ白でしたもん。なのに、ナルレイシアさんってば、うっとり『素敵』だなんて……大物なのか、頭のどこかがずれてるのか、それとも……」
よく考えるまでもなく、結構ひどい言葉を紡ぐアゼルフィアである。
しかし、その言葉を途中でひったくるようにして口を挟んできた相手のそれは、更にひどい

ものだった。

「ただの猿娘だ」

仏頂面で言い切った黒髪の青年を、隣に立つスカルトードが呆れたように見つめていた……。

雷馬――閃公という名前らしい――は、速かった。

地上からはるか上空を駆けているというのに、眼下に望む景色が見る間に変わるのだ。

「すごいですねえ」

窓から下を覗きこみながら、アゼルフィアが興奮しきりにそう言うのに対し、ナルレイシアは……答えられずにいた。

しかし、初めての――しかも一生に一度あるかないかの貴重な――体験に夢中になっている少女は気付かぬ様子ではしゃいでいる。

「信じられないぐらい速ーい。これならアシャスまでひとっ飛びですね！」

嬉しそうなアゼルフィアに答えたのは、鞍も手綱もつけていない――けれど箱形の車はくっ

ついている――閃公の背に跨ったネイスリーズである。
「この閃公は、その昔『その速さ雷光に勝る』と謳われた伝説の雷馬光糸馬の直系の子孫だからね、さすがに光に勝ることはないが、迫る勢いで走ることは出来るよ」
「すごいんですねえ……」
ひたすら感心する少女の様子に、愛騎を褒められた柱神は口元を綻ばせた。
だが、なにか引っかかるものを感じたのか、小さく首をかしげる。
「先ほどから小鳥姫の声が聞こえないが……書物でも読んでるのかな？」
その言葉に、アゼルフィアもナルレイシアの無反応ぶりに気付いたらしい――訝りをたたえた視線を投げてくるのを感じた。
「ナルレイシアさん？」
答えなくては――そうは思う。
思うのだ、が……。
（あ、駄目……指が震えだしちゃった……気付かれちゃう……）
うつむいたまま、半泣き状態でナルレイシアはぎゅっと両手でこぶしを握りしめた。
後悔先に立たず――という言葉を、彼女はいま、しみじみと噛みしめている最中なのだ……
いや、それ以上に閃公の美しさに感動するあまり、気付いて然るべきことに気付けなかった自

分の間抜けさにがっくり来ているというべきか。

（馬鹿だわ、わたしってば、救いようのない大馬鹿！　雷馬だってわかったのに……二対も立派な翼だってあったのに……なんでわたしときたらっっ！　空飛んでの移動だってことに気づかなかったのよおぉぉっっ!?）

せめて車に乗る前であれば、正直に打ち明けて移動方法の変更を願うこともできたというのに――ふわり、と浮遊感を覚えて初めて気付いたのだ。

（馬鹿だ、大馬鹿。救いようがないー）

泣きそうになるのを必死に堪えて、ナルレイシアは固く目を閉じた。

……実は、彼女は大の雷恐怖症であると同時に高所恐怖症でもあった。

不幸中の幸いの権化の異名に恥じず、これまで何度となく死線を彷徨う羽目に陥っては、何とか無事に生還を果たしてきた。「なぜ、あれで助かるのだ!?」と周囲に驚かれたのも一度や二度ではない。

そんな死線彷徨のひとつに、強風に煽られ、断崖絶壁から落ちたというものがある。

奇跡的に崖の途中に生えていた木に引っかかったおかげで擦り傷だけですんだのだが、彼女の恐怖は大きかった。何しろ――誰も、そんなところに彼女がいるだなどとは想像もしていなかっただけに――救助されるまでの一日半、ずーっと、木に引っかかったまま過ごしたのだか

ら。

風が吹く度に襟首だけで支えられた体はぷらぷら揺れるし、崖の下は岩礁だらけ、しかも打ち付ける波の激しさと言ったら！

あの恐怖だけはとても忘れられるものではない。

そうして、助け出された後も恐怖はしっかりナルレイシアに刻み込まれてしまい、以来ある程度以上の高所を、死ぬほど怖がることになったのだ。

（さっき、上昇するとき、雲を抜けたのが窓から見えた……雲の上なんて、雲の上なんて、断崖絶壁なんて比較にならない高さじゃない！　ああ、もう、怖すぎるっっ！）

いっそ気を失ったら楽になるだろうか――などと、ナルレイシアにしては珍しく後ろ向きなことを考えていた矢先のことだ。

ドン、と空中に爆発音が響き渡った。

「なんだ、空間が歪んで……!?　なにが起こった!?」

ネイスリーズの余裕のない声が耳に飛び込んできたとき、ナルレイシアは絶望的な気分に見舞われた。

（わたしったら……わたしったら！　なにもこんな空の上でトラブル引き寄せることないのに……っていうか、誘ったわけじゃないけど！　でも、絶対、わたしのせいだ……）

確信できてしまうあたりが悲しい。

しかし、ナルレイシアはこうも思った。

（あ、このまま飛んでたら危ないかもしれないのよね!?　だったら下に降りることにならないかしら……是非、なって欲しいわ！）

身勝手は重々承知の上で、そう願った彼女に――直後、罰が当たった。

なにかが、箱形の車の天井部分にぶつかり、屋根を突き破ってナルレイシアたちの上に落ちてきたのだ！

その衝撃でさしもの閃公も体勢を崩した。

ぐらりと揺れる車――ひしひしと命の危険を感じた瞬間、ナルレイシアは『落ちてきたもの』の正体に気づき、瞠目した。

雲よりも高い空の上――なのに更にその上から降ってきたのは……。

全身血に塗れた人間に見えるもの、だった。

11

ディエーン南部の街――イェイシス。
その街で一番の格式を誇る宿屋である『金糸雀苑』を訪れた一行は、旅人の扱いに慣れた宿の人間たちですら瞠目せずにはいられないような、一種独特な空気を纏っていた。
宿の玄関を訪れた彼らを迎えた男が、第一の被害者……もとい、これまで経験したことのない不思議な感覚に見舞われた者だった。
……なんというか、一見したところ、胡散臭いの一言に尽きる一行だったのだ。
それも無理はないだろう。季節はそろそろ夏だというのに、一行三人は全員、見るからに暑苦しい頭巾つきの、足首まで隠れるほどに長い外套を身につけていたのである。
よく見れば生地は上質の麻で、見た目ほどおかしなものではなかったが、それでも全員頭巾を深く被っていては、今度は不審を招くというもの。
そんなこともわからない世間知らずなのか、あるいはそれを承知の上で、それでも顔を隠さ

なければならない身上なのか――『金糸雀苑』で働く以上、どんな客にも変わらぬ態度を、だが見極めは的確に、という教育が完璧にたたき込まれている男は、一瞬彼らの身なりに目を瞠ったものの、それ以上の反応は示さなかった。

「ご宿泊ですか？」

決められた言葉を口に乗せながら、男は（予約なしなら間違いなく『お断り』の客だろうな）と考えていた。

言ってはなんだが、『金糸雀苑』はそんじょそこらの金さえ積めば誰でも泊まれるような宿ではない。

数百年も前から、マーシャス一族に忠誠を誓ってきた根っからの臣民が代々主人を務めてきた歴史ある店なのだ。

宿の主人は、イェイシスを束ねる頭衆のひとりでもある。

不審者を一族の本拠地であるアシャスに近づけないために、さまざまな手が用意してある。時にはわざと迎え入れて、内情を探ることもあるわけだが……この一行のあからさまな怪しさを考えると、その線は考えられない。

と、その時は男は思ったわけだが。

「ああ」

答えたのは、長身の男だった。
頭巾から緑がかった金の髪がこぼれ落ちる。手入れの行き届いた、美しい髪だった。
（おや）
と、男は少しばかり一行に対する認識を改めた。
これはもしかして、お忍び行を気取った世間知らずの名家の子息とその連れなのだろうか、と。
よくよく考えてみれば、この盛夏に全身をすっぽり覆う外套姿というのは不審を通り過ぎて奇怪な印象を与えるものだ。
本当に怪しい企みを抱いている者であれば、こんなばかげた格好をするわけがない。
となると、身分を隠すために的外れな装束を用意した上でお忍び行を実行に移したどこかの貴族の馬鹿息子――という線が色濃くなる。
（後ろの小柄なふたりは、馬鹿さまを放っておけなくて仕方なくつきあってるお付きって線かな？　この暑いのにご苦労なこった）
と、勝手に判断を下しかけた男だが、次の瞬間文字通り凍り付いた。
「あー、暑い、暑い！　麻で仕立てたけど、全然涼しくなんかないじゃないか」
うんざりした声でぼやくなり、先頭の青年が我慢ならないとばかりに頭巾を払いのけたので

ある。

その下から現れたのは――。

「ネイスリーズさま！」

咎めるように、後ろに控えていた小柄な外套のひとりが慌てて青年に駆け寄った。

声は明らかに十代の少女のものだった。

「いけません！　お顔は極力晒さないというお約束だったではありませんか！　その無駄に綺麗なお顔のせいで、先日も大騒ぎになったことを、よもやお忘れではございませんでしょうね!?」

大変な剣幕だった。

しかし、少女のその態度を、わざとらしいだとか大袈裟だとかは、男は欠片も思わなかった……否、思えなかった。

ネイスリーズと呼ばれた青年の、頭巾の下から現れた顔は、男の思考力のすべてを奪い尽くしてあまりあるほどに……とんでもない代物だったのだから。

艶やかな緑がかった金の髪、真夏の陽射しさえ侵すことをためらうに違いないと思えるなめらかな白皙、長いまつげに縁取られた形のいい瞳に宿るのは煙る灰緑の色彩。

優美にして優雅――究極の美の結晶がそこにあった。

（これは……現実か……？）

目前に晒されたあまりにも現実離れした美を前に、男は凍り付いていた。

その美神としか呼びようのない青年の元に駆け寄った少女は、「いいから、頭巾被っといてください！」と叫ぶなり、男が先ほどまで胡乱の極致と思っていた頭巾を青年の頭に無理矢理被せた。

すかさず、青年が文句を垂れる。

「暑いんだって！　ひどいじゃないか、ナーシア！　君はこのわたしに汗疹だらけの見苦しい顔になれと言う気かい!?」

ナーシアと呼ばれた少女も、しかし負けてはいなかった。

「汗疹だらけ、大変結構な話です！　そうすれば、その無駄に綺麗なお顔を目当てに寄ってくるろくでもない輩も少しは減ろうというものですしね！」

この台詞に、男は一行の怪しい格好の理由を悟った。

とんでもない美貌の青年は、その麗しさゆえによからぬことを企む者にさんざん狙われてきたのに違いない。

（確かにこの顔じゃあ、狙ってくださいって言ってるようなもんだもんなぁ）

おつきの者たちは、暑いとしきりに文句を垂れる青年を宥めるために同じ格好をしているの

か――。

（しっかし、こんな顔してて、お付きがふたりきりというのは少々不用心じゃないか？）

と、微かな引っかかりを覚えたときのこと、青年が苛立ちのあまりか暴挙に出た。

自らの頭巾ではなく、口うるさい少女のそれを払いのけたのである。

露になったのは、眩いまでの黄金の髪と蜂蜜色の大きな双眸――青年ほど衝撃的ではないが、滅多にお目にかかれない極上の美少女の顔。

「わたしのことばかり言えないだろう、ナーシア。前々回は君を狙って襲われたじゃないか」

「ネイスリーズさまよりは格段に頻度は落ちます！　大体、ネイスリーズさまが歩いて旅をしたいなどとおっしゃらなければ、こんな格好をする必要はなかったんです！　いつものように閃公でひとっ飛びなされば……！」

男はここで内心首をかしげた。

（ひとっ飛び……？）

謎な言葉である。

しかし、男の疑問など知るものかとばかりに、異様に目立つ二人組の会話――というよりは口論は進んでいく。

「そんなの風情がないじゃないか！　せっかくマーシャスの女神縁の方を訪ねるんだよ？　ゆ

つくりと思い出に浸りたいじゃないか」

「浸る思い出なんて、ネイスリーズさまにはないじゃありませんか。お方さまから頼まれただけでしょうに」

「そのお方さまから色々お話を伺ったんだよ。まったく、ナーシア、君ときたら……わたしに対して冷たすぎやしないかい？　仮にもわたしはこの世界の『空』を支える――」

「そこまでです、おふたりとも！」

青年の言葉を横から遮ったのは、それまで沈黙を守っていた三人目の小柄な人物だった。

これもまた若い。十代半ばの少女のものだ。

ぴたり、と眼福コンビが口をつぐむのも無理はなかろう――第三の声には、抑えきれない苛立ちと怒りが宿っていたのだから。

「いいかげんになさってください！　往来で話すようなことではないでしょう!?　それに、おふたりとも大事なことを忘れてらっしゃいませんか？　ライさんは大怪我を負ってるんですよ、一刻も早く休ませてあげて、お医者さまに診ていただかなければならないというのに……っ！」

先ほどの――ナーシアと呼ばれた――少女のそれを上回る、大変な剣幕だった。

明らかに年下の少女に叱りつけられたふたりは、気まずそうに俯いた。

「ごめんなさい」
「悪かった」
謝る声も力ない。
そんなふたりに、少女はため息を洩らすと、青年の方に声をかけた。
「ネイスリーズさま、ではライさんをお願いします。わたしたちには風霊の気配は感じ取れても、意志の疎通はかなわないのですから」
青年が主人であることは確かなようだが、台詞の内容を聞いていると主従が逆転しているように思える。
そして、青年がまた素直にうなずくのだから奇妙な光景だ。
「わかったよ。確かに一刻も早くライは休ませてやらないといけないね。わたしたちを逃がすために怪我をしたんだから……」
そう言うなり、青年は頭巾を被ったままの少女の隣――なにもないはずの空間に、すい、と優雅に両手を伸ばした。
「お前たちありがとう、もういいよ。わたしが引き取ろう」
意味不明な言葉は、しかし次の瞬間、目を疑うような現実とともに意味をなすものとなった。

なんと空中から突然、意識がないらしい男が出現し、金髪の青年の腕に収まったのだ！
（なんだ、いまのは!?）
宿の男はあまりにも信じられない出来事に声をなくした。
しかし、青年は男のそんな様子には気付かないのか――あるいは慣れているのか――なんでもない様子で声をかけてきた。
「この通り、怪我人を抱えててね、休ませてやりたいんだが、空いてる部屋はあるだろうか？」
男の決断は早かった。
「大丈夫かと思います。さあ、お入りください……お荷物をお持ちしますね」
言いながら、少女たちの手から鞄を奪……もとい受け取った。
男の脳裏に、聞き逃しにすべきではないと思われる数々の言葉が甦る。
（「マーシャスの女神」「空を……」「風霊」……そして、今の手品か手妻か……こいつは調べる必要がある）
そのためにも、四人に増えた一行を是が非でも引き留めなければならない。
早くこのことを主人に伝えなければ――逸る気持ちを抑えつつ、男は彼らを受付に先導した。

一番年下の少女が、呆れたような目をふたりの連れに向けていることに、だから男は気づけなかったのだ……。

「……おふたりとも、役者になれますよ」

場所は『金糸雀苑』の一室、無事に拾いモノである男を寝台に休ませ、医師を呼んでの騒ぎも治まった後、呆れたようにも感心したようにも聞こえる口調で、アゼルフィアが洩らした一言である。

「どうせ警戒されるのなら、あからさまに怪しいほうが向こうも動いてくれそうだと思ったからね」

決して賞賛の声ではないことを感じたのだろう、ネイスリーズが苦笑まじりにそう答えた。

「怪我人連れてちゃ、どっちみち閃公で移動できませんでしたからねえ……ネイスリーズさまの気を分けてあげても傷口が完全には塞がらない大怪我してましたし」

ふう、と息をつきながら、アゼルフィアは複雑そうに寝台に眠る……と言うか、未だ意識の戻らない男に目を向けた。

医師の手当てを受けた男は、今は全身を包帯でぐるぐる巻きにされた状態だ。
治療にあたった医師が驚きを隠せないほど、体中傷のないところはないという悲惨な状況で、しかも十カ所近く縫合が必要な深い傷があったのだ。
それらがみな、すっぱりと切り裂かれたものであったため、ネイスリーズは素顔を晒した上で、自分たちを安全な場所に逃がすために大勢の賊と戦った際受けた傷だと説明した。
人外美貌がものを言い――隣にいたナルレイシアの容貌も加勢したのは言うまでもない――医師も宿の者もなるほどと納得してくれた。
『美しすぎるというのも大変ですなあ』
と、妙にズレた同情を向けられた時は噴き出すかと思ったけれど。
（それにしても……）
アゼルフィアは豪華な室内を見やり、目眩を感じた。
寝室を含め五室もあるこの宿の最上級の部屋の一泊の値段を考えたら、これからしばらく滞在する上で、いったいどれほどの金貨が飛んでいくのか……想像するのも恐ろしい。
（そりゃあ、柱神さまだってことはばらす予定なんだし、下手に質素な部屋を借りてもネイスリーズさまが浮くだけだとはわかってるけど……）
因みに宿泊費、食事代、治療代は全部ネイスリーズが担当することになっているから、アゼ

ルフィアが悩む筋合いではないのだが……それは重々承知してはいるのだが。

それでも。

（なるべく花瓶とかグラスとか、割れそうなものには触らないようにしよう……）

と、密かに心に誓わずにはいられない。

何にしても、後は待つしかないのだ——男の意識が戻るのを。

（ほんっと、偶然って恐ろしい）

血だらけの人間が、雲の上を走っていた『雷馬車』のさらに上から降って来たときも仰天したが、その血を拭ってみたら、それがエアランで垣間見たウォルセンを攫った黒髪の青年だったのにはもっと驚かされた。

誘拐犯がなぜこんな突飛な場所に湧いて出たのかとか、なぜこんな大怪我を負っているのかとか、色々と謎は尽きないが、ウォルセンの行方を知る上で、一番の手がかりが自分から飛び込んできたのは紛れもない事実だったため、三人は急遽予定を一部変更し、空路でなく陸路で移動することとしたのだ。

前述のとおりの怪我で、結界術師を医師に診せる必要がどうしてもあったからだ。

手当てはすんだが、男の意識はまだ戻らない。

（……早く、目覚めてよね……）

間違ってもこのまま永眠だけはしてほしくない、とアゼルフィアは思う。

ウォルセンへの手がかりが消えてしまうからという理由だけではない。相手が何者であろうと、目の前でその命が尽きていくさまを見るのはどうにも悲しいからだ。悪人でも敵でも――現時点において、アゼルフィアにとっての結界術師は、そうとしか思えない相手だった――死んでくれてせいせいした、とは到底思えないのだ。

そしてそれは、ナルレイシアも同じだと確信している。

拾いモノの正体を知ったとき、ものすごく複雑な顔になって、そのくせ一番熱心に応急処置を施したのはナルレイシアだった。

聞けばこの男のせいで、死ぬような目にあったという話で、心底から嫌っている様子だったというのに、彼女は男の死を純粋に望んでいなかった。

いまだって、医師について行って、薬草や塗り薬の詳しい説明を受けているところなのだ。

とんでもないトラブルを引き寄せるはた迷惑な体質の主ではあるが、彼女は本当にやさしいひとなのだと思う。

だから、創世七神は彼女に複数の柱神を見極める役目を与えたのだろう。

本人にとっては不本意かもしれないが、それでも彼女によって見いだされる神宝の半身たちは幸せだと思うのだ。

脳裏に甦るのは、エアランを発つ前日の夜のこと。

『もしもその男が、絶対にイヤだと……神になどなりたくないと言い張ったら、どうするつもりだ？』

とエルスカーネ公爵に尋ねられた彼女は、ため息混じりに答えたものだ。

『その時は仕方がないから努力の限りを尽くして長生きするわよ。そうしてウォルセンさんが天寿を全うするのを見届けた上で、老骨にむち打ってでも新たな候補を捜してやるわ』

と――。

自分も含めた彼女自身を除く全員が、思わず息を呑んだものだ。

それほどの覚悟を抱いて、彼女は務めにあたっているのだ。

だからこそ、彼女には望みを果たしてもらいたい。

そのためにも――。

寝台に再び目を向けて、アゼルフィアはつぶやいた。

「死んだりしたら承知しないんだから」

そんな彼女の肩を、ネイスリーズが優しくはたいた――大丈夫だよ、というように。

12

リーインは、昏い淵をたゆたっていた。
体が鉛のように重い。
死ぬのか――ぽつりと浮かんだ考えは、静かな水面に落ちた一滴の雫のごとくゆらりと波紋を広げて行く。
胸に、心に染みこんでいく……これは諦めかあるいは理解か。
（ああ、抵抗する気になれない……まずいな、これは）
死を受け入れつつある自身を感じながら、リーインはぼんやりと思った。
決して死ぬわけにはいかない身であるというのに、体も心も重くて、足掻く気力も残っていないのだ。
（まあ、ルアン兄に生きたまま捕らえられなかったことだけで、よしとするしかないか……）
不本意だが、最悪の事態だけは回避できたのだから。

そう思いながら、彼はふう、と息をついた。

我ながら後ろ向きな考え方だとは思ったが、どうにも力が入らない。

完成間近な結界を、別の結界をぶつけることで破った結果、歪み撓んだ空間の狭間に投げ出されたことは覚えている。

その際、歪められた空間が千の刃と化して全身を襲ったことも。

恐らく、自分の肉体は目も当てられない状態に陥っていることだろう——どうせなら、他人に不快な思いを味わわせずにすむよう、どこぞの辺境にでも放り出されてくれていればいいと思う。

そこで朽ち果てるか、獣や鳥に喰われるか——どちらにしても、自分には似合いの末路かもしれない。

（あー、エアランの街で選の巫女を見かけたとき、イヤーな予感はしたんだよなー。まさかルアン兄が出てきてたとは……ほんっとに、ついてなかったよなー）

戦いこそしたが、リーインは兄弟子のことが好きだった。

真実がねじ曲げられてしまった以上、誤解を解く術はなく、戦いはいわば必然の成り行きではあったが、それでも彼を傷つける気にはどうしてもなれなかった。

その結果がこれであるのなら、黙って受け入れるしかない。

ルアンを恨む気にはなれない——あの兄弟子が誰より真っ直ぐな気性の持ち主であることを知っているからだ。そして一門の他の誰より情が篤いであろうことも。

自分を殺したことを、彼は他者には気取らせぬよう、しかし深く悲しむだろう。

それを思うと、彼には亡骸を晒したくないと心底思う——死体が見つからない限り、彼は自分の死を確信せずにすむであろうから。あの優しい兄弟子を苦しめたくはないのだ。

（しっかし……走馬燈ならとうの昔に回りきったっていうのに、まーだお迎えは来ないのかねぇ？　いい加減、この重い体はどうにかして欲しいんだが……）

そんなことを思っていると、遠くからなにかが聞こえてきた。

耳をすましてみると、それは誰かの声のようだった。

——きゃあぁっ！　なにこれ、なにこれ、なにこれ!?

（おれが知るかよ）

——真っ赤……って、これもしかして全部血!?

（だからおれは知らないって）

——なんだって、空から血まみれの男が降ってくるのよ!?　しかも、なに、このありさまは！

血まみれ、降ってきたという言葉に、リーインはもしかしたら、と思った。

（あー、もしかしておれの死体の発見者の声なのかな……？）

だとしたら、悪いことをした。

聞いた限りでは、まだ若い娘の声のようだ。いきなり血まみれ死体とご対面とは、精神面に多大な衝撃を受けたに違いない。

（心的外傷にならなきゃいいけど……）

不幸な巡り合わせで見たくもないものを見てしまったであろう少女を気遣う思いは、しかし次の瞬間、リーインから霧消した。

――豚の血の入ったバケツでもひっくり返したんじゃないでしょうね。

ぷつり、と音をたててリーインの思いやり回路が断線する。

（豚の血だと、失礼な！　大体、聞いてるとこの娘、かなり図太くないか？　普通、一般的なお嬢さんは衝撃のあまり気を失ったり、声をなくすところじゃないか？　なのに、妙に落ち着いて、おまけに豚の血だと!?）

ぷんぷん怒っていると、今度は別の声が聞こえてきた。

――さすがにこの状況でそれはあり得ないと思うけど……。

こちらも少女の声だった。

（そうだ、お嬢さん。あなたが正しい）

届かないことは承知の上で、リーインは新たな声の主の味方についた。
――あら、空から人間が降ってくることだって、普通あり得ないじゃない。それならなにがあってもおかしくないわよ。
どういうわけか、最初の少女は自分の主張を曲げようとしない。
単なる意地っ張りなのか、あるいは自分を曲げることのできない性格の主なのか――しかし、正解は違うところにあったらしい。
――現にわたしは、腸詰め用にバケツに溜めてあった豚の血を頭から被ったことあるんだもの。運んでた小父さんがつまずいた拍子にバケツを放り投げる格好になっちゃって……バケツは頭に被さったままだし、本当にあの時はさんざんだったわ！
その時のことを思い出したのか、声に怒りが滲んでいた。
逆に怒りが削がれたのはリーインだった。
少女を襲った実に間抜けな不幸に、心からの同情を覚えたのだ。
（なんとまあ、滅多に体験できないようなことを……）
もしかして、同志を求めていたのだろうかと思うと複雑だったが。
しかし、そんなことを思った直後だ。
少女が再び悲鳴を上げた。

（なんだ？）

――やだ！　弱いけどまだ息があるじゃない！　大変、すぐに止血しないと……って、これじゃあどこが傷口かもわからないわ！　まずは血を拭わないと！

焦りも露な少女の声に、リーインは思わず目を瞠った。

（……生きてる……のか、おれは？）

半ば呆然と、彼は思った。

生きているのであれば、希望はある。

兄弟子の誤解を解くことも、歪められた真実を正すことも、貶められた誇りを取り戻すことも……なにより、尊い命を救うことができるかもしれない。

どくり、と胸が脈打ったような気がした。

体は相変わらず重い――だが、心は先ほどまでのように、深く沈み込んでいく感じがしなくなっている。

（生きているのなら――）

自分は、生き続けなければならないのだ。

そのための努力を、戦いを放棄するわけにはいかない。

次第に鮮明になってくる痛みは、これ以上はないというほど大きく鋭いものであったが、彼

は生の証として正面から受け入れた。
そうして――不意に、明るくなった世界で。
（あ？）
リーインは意外なモノを目にすることになった。
こぼれ落ちるのではないかと思うほど、大きな蜂蜜色の瞳は、確かに目にした覚えのあるもので――しかもさらりと流れる金の長い髪との組み合わせは、彼の記憶を激しく刺激した。
……非常によろしくない方向で。
（げ。選の巫女!?　なんで夢にまで出てくるんだ。ったく、縁起が悪いったら……消えてくれよな、頼むから）
なにしろ、選の巫女たるナルレイシア・フォイリリル・ダカールと関わることでろくなことがあった試しがないのだ。
（おれの夢なんだから素直に消えろっての！）
いくら念じても消えないその顔に、いい加減自棄のようにリーインは「しっ、しっ」と口にした。
体は相変わらず重く、とても手を持ち上げられなかったからだ。
選の巫女は、どこまでもリーインの期待に添ってはくれないようで、やはり消えてはくれな

かったが、ひどく驚いた顔になったのが、少しばかり愉快だった。
（豆鉄砲喰らった鳩みたいで可愛いじゃないか……）
そこまで思ったところで、再び視界が闇に閉ざされた。
だから――リーインは知らない。
それが夢でもなんでもない現実であったことを。
そして宿について三日後、ようやく目を開けた彼の第一声が「しっ、しっ」という、ハエかなにかでも追い払うようなものであったことに――しかも、明らかにそれが自分に向けられたものだと理解したがゆえに――再び意識を手放した彼の前で、ナルレイシアが真っ赤になって怒りくるったことを。

血まみれで空から降ってきた黒髪の結界術師が本格的に意識を取り戻したのは、『金糸雀苑』に滞在するようになって四日目のことだった。
その間、ナルレイシアとアゼルフィアは献身的に看病に努め、ネイスリーズは衰弱を防ぐために自らの気を食事と同じタイミングで結界術師に与えていた。

だから、彼が目覚めたとき、そこにいたのがナルレイシアひとりきりだったのは単なる偶然に過ぎない。

しかし――しかしである。

これが両者にとっての不幸であったのは確かな事実だ。

ゆっくりと瞼を持ち上げた青年は、焦点の定まりきらない瞳をナルレイシアに向けていたのだが、それが誰かを認識した――と思しき――瞬間、思い切りイヤそうに顔を顰めてくれたのである！

しかも、開口一番の台詞というのが「なんであんたがここにいるんだ、疫病神」だったのだからナルレイシアも報われない。

最初に目覚めたときは「しっ、しっ」、二番目に口から飛び出したのがこれでは、いかにお人好しのナルレイシアであっても殺意を覚えたとしても仕方ないだろう。

（埋めてやろうかしら、この男……）

半ば以上本気で思った彼女に罪はない……多分。

いかにして、どのように埋めてやろうかと、頭の中で楽しく想像しているナルレイシアの前で、結界術師はうんざりした様子を隠そうともしない。……彼女の想像の中身が過激さを増したのは言うまでもなかろう。

「……あんたたち、エアランにいたはずだろう？　なんでこんなとこにいるんだよ。ずいぶん離れてるはずだけど……って、あー、すまん、ここはどこだ？」

これに「わたしは誰？」が続けば、王道的展開だったのかもしれないが、そうはならなかった。

そして、ある程度予想していたことだけに、この奇妙な質問に彼女が不審を覚えることもなかった。

「ふぅん。空から降って来るなんて突飛な登場した時点で、空間を飛ばされたんだろうってネイスリーズさまが仰ってたけど、本当みたいね。エアランからずいぶん離れてるって言ったわよね？　飛ばされる前はどこにいたのか、どこに向かっていたのか、答えてくれたら教えてあげてもいいわよ？」

恐らくウォルセンの行方に繋がる情報が、そこにはあるはず――そう思い、逆に問い返したナルレイシアだったが、相手はうっかり乗ってくれるようなかわいげとは無縁の男だった。

「それなら別に教えてもらわなくてもいい。別の素直な誰かに尋ねりゃすむこったもんな」

満身創痍で目覚めたばかりの人間とは思えないほど、ふてぶてしい笑顔で切り返され、彼女はぎりり、と唇を噛んだ。

憎らしい――四分の三ぐらい本気で殺意を抱きそうになった。

悔しさが顔に出てしまったのだろう――青年がにやにやと人の悪い笑みを浮かべた。
「お嬢ちゃんぐらいの経験値で、おれから情報を引き出そうだなんて無理無茶無駄ってもんだからやめとけよ。こっちはこれでも信用第一の身の上だ。依頼人や依頼内容を易々と明かすわけがないだろうが」
だから諦めな。
勝ち誇ったような、ではなく、幼い子供にでも言い聞かすような口調なのがますますむかついた。
出会い頭からまんまとしてやられたせいだろうか、どうもこの青年が相手だと、常に先手を取られるような気がしてならない。経験値の差ばかりが理由とは思えないのだ。
だが、負けっぱなしでいられるほど、ナルレイシアの気性は穏やかではない。今回は特にウォルセンが関わっているのだ。
（退いてたまるもんですか！）
不屈の闘志を胸に、ナルレイシアは反撃を試みた。
「あら？　ナサリエル公爵邸からは早々に姿を消したと聞いたけど？　公爵が悔しがって色々愚痴ったみたいよ、肝心なときに役に立たないって」
一年ほど前にディエーンの王都ロスタロイドで起こった黄金竜騒ぎの最中に、この青年はひ

とりでさっさと姿を消したのだ——事件の首謀者であるナサリエル公爵に言わせると、契約を途中放棄して逃げ出した裏切り者ということになる。

しかしこの言葉も、結界術師の青年に打撃を与えることはできなかった。

「ああ、あれねー。ありゃあ、あの公爵が悪い。先に契約内容に違反したのは向こうの方だ。自分は好き勝手しておきながら、おれだけ契約内容に従えってのは無茶な話だろう？　大体、御柱候補の本命と選の巫女の両方に手を出して無事に済むと考えられる頭が信じられないよ。どんだけ能天気なんだとあの時は本気で呆れたね」

医師によれば、肋も数本折れているとのこと——長く喋るのは辛いはずなのだが、青年の様子からはそんなものは感じ取れない。

相当な精神力の持ち主なのか、それとも肋に負担をかけないコツでもあるのか……どちらにしてもナルレイシアにとっては面白くない。

他人が苦しむさまを見て楽しむ性癖はないけれど、ことこの男に関してだけは少しぐらい痛い目を見てもいいのではないかと思ってしまうのだ。

これが負けず嫌いの性格からくるものなのか、もっと別のなにかからくるものなのかは、彼女にもわからないのだけれど。

「ああ、そう。見切りが早くて結構なことね。公爵と一緒に捕まってたら、きっといまごろ鉄

格子のなかで健全な毎日を……」

送っていたでしょうに――と続けようとして、ナルレイシアははっと息を呑んだ。

男は何と言った？

御柱候補の本命と選の巫女――確かにそう言ったのではないか？

西方社会の言い回しとは違うが、御柱が柱神、選の巫女が選定者を示す言葉であることは疑いようがない。

（どうして……どうしてこのひとがそれを知ってるの!?　リオライーシャさまのこともわたしのことも、ディエーンでもごく一部にしか知らされてないはずなのに！）

衝撃が大きすぎて、彼女は動揺を隠すことができなかった。

そんな彼女を見て、結界術師は珍しく皮肉の感じられない笑みを浮かべた。

もっとも、呆れは多分に含まれてはいたが。

「考えるまでもないだろう？　ナサリエル公爵の屋敷の庭に黄金竜の幻が出現したんだ。あの娘以外、誰にそんなことが出来るっていうんだ。付け加えるなら、ただの候補にあんなものは出せやしない。結論、あの娘が本命に違いない。簡単だろう」

それはそうかもしれないが、事情に通じていない者にとってはちっとも簡単なことではない――つまりこの男は柱神や選定者について、かなり深い知識を持っているということだ。

（油断ならない男だわ）

内心ため息をつく彼女に、結界術師はさらに楽しげに続けた。

「で、あんたが選の巫女だとわかったのは、もっと簡単。あんた、おれと最初に出会ったときのこと、覚えてるか？　あんたが外と連絡を取るために、塀の外に投げようとしたあれ、『証の硬貨』だったろうが。あれを持ってたあんたが選定者じゃなきゃ一体なんだっていうんだ？　な、簡単だろう？　で、無事にお務めを果たしたはずのあんたは、こんなとこでなにやってんだ？　それとも、あの暴走で本命のお嬢ちゃんでも死んじまったのか？　で、次の候補を捜してるとか？」

聞き出すのはこちらの方であるはずなのに、気付けば質問攻めにあっている。

本当にやりにくい相手だ。しかも、こちらが反応せずにいられない言葉をいちいち選んでくるあたり、いやらしいったらない。

「勝手にリオさまを殺さないでちょうだい。あなたの言うとおり、ちゃんと無事に終わったわよ。リオさまの体に負担がかからぬよう、儀式は成人後に行うことになっているから、正確な意味では次代さまとはまだ呼べないけれど……」

リオライーシャは入れ替わった双子の姉であるユーカリィヤとして、斎王院の別宮で、次代柱神としての修行を積みながら暮らしている。

双子の入れ替わりはアマンシールの協力あって初めて実現した極秘中の極秘事項なのだが、この男には隠しても仕方がない。

下手に隠そうとしたところで、こちらの神経を逆撫でする方法で、どうせ事実を暴くに違いないのだ。

ならば素直に認めたほうが、いくらかでも精神衛生的にはましというもの。

そんなナルレイシアの心中を読んだのか、男は多少つまらなさそうに「ふうん」とつぶやいた——手応えがなくてつまらないとでも言いたげに。

どこまでも癇に障る男である。

（ああ、埋めたい。世界の底の底まで届く深い穴を掘ってこの男を埋めてしまいたい。ああ、でもまだ駄目。ウォルセンさんの行方を聞き出さないうちは、埋めるわけにはいかないわ……でも、どうもわたしじゃ無理そうだし……ネイスリーズさまのお力をお借りするしかないかしら……。そうして知っていること洗いざらい聞き出したら、いよいよ穴を掘り出して……）

目的が微妙且つ奇妙に変化しつつあることを、ナルレイシアは自覚していない。

つまりそれだけ男に手玉にとられるだけなのが悔しくてたまらないわけなのだが、やはりそれがなぜなのかは理解していない。

しかし、彼女は間もなくこのストレスから解放されることとなる。

皮肉なことに、きっかけを作ったのは結界術師の方だった。

「それで、務めを終えた選の巫女さんは、なんだってガライラの御柱と一緒に行動しているわけ？　エアランでは銀髪の御柱と紫公爵が一緒にいただろう？　てっきり皆で避暑かなにかに出かける途中かと思ってたんだが……もしかして、途中でガライラの御柱に口説かれて一緒に旅行に出かけることになったとか……？　あれ、それだとふたりきりのはずで、あの女の子が一緒なのはおかしいな。そう言えば、あの女の子、アゼルフィアだっけ、なんであんたたちと一緒にいるの？」

もしかしたら、それは思うように動けない彼の八つ当たりに近いものがあったのかもしれない。

わざと下卑た推論を混ぜることで、こちらを動揺させてその反応を楽しもうという、非常に悪趣味な狙いがあったのかもしれない。

しかし、その彼の悪戯な意図が、ナルレイシアの逆鱗に触れたのだ。

当然である。ナルレイシアは必死なのである。四人もの柱神に対する『選定者』の務めを負わされ、早急に片付けてさっさと本に埋もれた楽園の日々を送りたい、などと能天気なことを言いながらも、実際は不安で仕方なかったのだ。

本当に、四人もの柱神を見極めることができるのだろうかと。

神宝と出会うことができるだろうかと。
不安で仕方ない心を、やさしい周囲の協力があればきっと大丈夫だと自分自身に言い聞かせて何とか不安をやり過ごしてきたのだ。
なのに、この結界術師と来たら！
わかっているのかいないのか、こちらの不安を的確に突いてくれて！
おまけに一番脆い部分を狙ったかのように！
ぷつ、とナルレイシアのなかで、なにかが切れる音が響き渡った。
なにがどうとは説明できないが、ぐしゃぐしゃに捻れてはち切れてしまったなにかを、この時ナルレイシアは感じていた。
だから、その後の反応は——言うなれば感性のそれと呼ぶべきものだったのだ。
「……っさい」
聞こえなかったのか、男は「は？」と目を瞠った。
「うるさいと言ったの」
はっきり言い切った後、ナルレイシアはぎり、と結界術師を睨みつけて叫んだ。
「さっきから黙って聞いてたら能天気なことをずらずら、ずらずらと！　こっちにはそんな余裕なんてないっていうのに！　ふたつめのお務め果たすために、わたしはいま、ひたすらに必

死なの！　今回のを含めて、まだあと三つもお務めが残ってるのよ!?　必死にもなるってもんでしょうが！　もういい。いいから吐け！　ウォルセンさんはどこにいるのよ!?　ご託はいいからとにかく吐け！　吐いてしまえぇーっっ！」

それでも、満身創痍の襟首を摑んでがしがし揺らさなかっただけ、まだ理性と言うか、良心は残っていたと思う。

もっとも、その折のナルレイシアの表情を指して、唯一の目撃者である男は「あれこそ鬼の形相と呼ぶにふさわしいものだった」などと、失礼極まりない証言をしてくれたものだが。

しかし、彼女のこの自棄とも言える返答こそが、結界術師にとっては致命的な一撃だったのだ。

「あと、三つ……？」

信じられないことを聞いた。

そんな顔をして問い返してきた男に、すっかり頭に血が上ったナルレイシアは「ええ、そうよ！」と叫んで答えた。

「あと、三つもあるのよ、『証の硬貨』が！　三人も見つけなきゃいけないのよ、新しい柱神さまを！　しかもウォルセンさんはもう殆ど確定人員なの！　わたしはなんとしてもウォルセンさんを捜しだして神宝翠唱子を受け入れてもらえるよう説得しなけりゃならないの！　そう

しないと……私のバラ色の人生設計が水泡に帰すのよ！　ファティ・リンシャのお屋敷で、書庫に眠る稀覯本に埋もれて過ごす至福の時……！　駄目だわ、絶対に諦めることなんてできやしない……！」

その時、ナルレイシアの脳裏に浮かんでいたのは、住み込みで働いているファティ・リンシャの屋敷の書庫の豊富な書物のタイトルだった。

前途の多難さを認識しつつも、敢えて無視してその先にある楽園の日々を見つめようとする彼女にとって、それは『楽園』の象徴だった。

現実がどこまでも厳しいことを知るからこそ、楽園の夢はどこまでも甘美に――。

（どうせ、この男が素直に答えてくれるわけないし――）

そう思ったナルレイシアの予測は裏切られた。

「わかった」

唐突に、結界術師はそれまでの癖ありありな空気を収めて告げたのだ。

意味がわからないナルレイシアは当然「なにが？」と尋ねた。

返ってきたのは、驚くべき答えだった。

「お前たちの聞きたいことに、おれは知る限りの答えを返そう」

それまで、ひとつだってナルレイシアの質問に答えようとしなかった男の突然の態度の豹

変に、ナルレイシアがおどろかないはずがなかった。

だが、結界術師の声に偽りの響きは感じ取れなかったから、彼女は簡潔に「なぜ」とだけ問うた。

結界術師の答えも簡潔だった。

「あんたが虹神に選ばれた巫女だから」

意味はわからないものの、なぜか聞いた瞬間、肩にずしりと重いなにかがのしかかってきたような気がしたナルレイシアだった……。

せっかく手に入れたというのに、可愛い優しい小鳥は逃げてしまった。
つまらない枷をつけようとする慮外者がいたせいで、優しさ故に小鳥は逃げ出した。
そんなことが、この自分に許せるはずがないというのに。
それでも、小鳥の気持ちは理解できたから、しばらく思うがままにさせておいた。
だが、それももう終わりだ。
なにより自分が小鳥をそばに望んでいるのだ。
慮外者など切って捨てよう。
余計な枷など壊してやろう。
そうして小鳥は自分のそばで歌えばいいのだ。

黒鷲城の一室で、アシュアイードは静かに目を閉じていた。

蠟燭の炎が頼りなく揺れて、壁に彼以外の影を映し出しても、その瞳が開かれることはなかった。

ただ、唇が短い言葉を紡いだだけ――。

「……首尾は」

気配を殺した配下の答えもまた短い。

「すでに――」

「万が一にも遺漏はあるまいね？」

微笑を刻んだ唇から洩れる声はどこまでも穏やかだ。

「誓って――」

答えるそれは、淡々としたもの。

「ならば、いい」

満足げにうなずき、アシュアイードは静かに目を開けた。

――待っておいで、ディー。

いまはそばにいない、大切な存在に声なく語りかける。

――君を繋ぐ枷など、すぐに壊してあげるから……。

そうすれば、もう誰も彼らが共にあることに異を唱えることはない。

「……そう言えば」
ふと思い出したように、翡翠の双眸を持つ青年がつぶやいた。
「イェイシスに、珍しい客人が滞在中だという話が聞こえてきたよ」
「イェイシス……ですか？」
配下の声は訝りを孕んでいた。
「そう……マーシャスの女神縁の品を、我が家に譲るためにいらしたという話だ……」
「それはまた、突拍子もないお話で……」
声が呆れた響きを宿すのに、アシュアイードは「そうとも言い切れなくてね」と答えた。
「ガライラの柱神ネイスリーズさまご本人らしいからね……あながち嘘とも思えない」
もっとも——と、彼は口の端を上げながら意味深長に言を継ぐ。
「本題は別にあるのかもしれないけどね」
相手は答えない。
しばしの沈黙の後、別の方向から、違う声が問うてきた。
「調査いたしましょう」
「念入りにね」
「かしこまりました」

その言葉が終わると同時に、ふつりと気配が消えた。
今度こそ、ひとりきりになった室内で、アシュアイードは半眼を閉じた。
「世界の『空』を支える方々が、いったい何をお考えやら――」
見えてこない柱神たちの真意に、彼は微かな苛立ちを覚えた――。

あとがき

この本が出るころは、まだまだ残暑厳しい日々が続いていることと思いますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

毎年「今年こそ」と思うのですが、今年もやはり夏バテ回避を誓う前田珠子です。

今回はあまりお待たせせずに出せました（すべては関係各所の皆様のおかげです）『天を支える者』緑の章第四巻『緑玉の枷に繋がれ』をお届けいたします。

三巻の『緑蘿』では、ウォルセンの過去が大部分を占めたせいで、展開があまり進まなかったので、今回はさくさく行こうと思ったのですが……うーむ、如何でしょう？

今回、ウォルセンが大変なことになりました――と書いてから、改めて読み返してみると、本当に大変なのはリーインさんでした（笑）。

戦闘シーンなんて書いたのは何冊ぶりだろう……しかも特殊戦闘。

以前はどうやって書いてたっけと、記憶をさぐりながら苦労しつつ書きました。臨場感が出

ていればいいのですが。しかし、結界術師同士の戦闘なんて地味だろうと思っていたのですが、なかなか結果は派手目なものに……やはり『呪文（違います）』の詠唱が場を盛り上げるのでしょうか。書いてどこの少年漫画かと思わないでもありませんでしたが（笑）。

リーインの兄弟子のルアンはいずれまた登場する予定です（章の色が変わってから）。

そうして、ナルレイシア――今回は半分以上は出せました。前回約四分の一しか登場させられませんでしたから、今回は彼女に破竹の勢いを期待していたのですが……これまで棚上げしていた事情説明があるはあるは。

ああ、これも書いておかないと、そういえばあれもまだだった、後はそうそうこれも入れないと――と、プロット片手にチェックした項目の多いこと。風呂敷は広げるのは容易いけどたたむのは大変だといういい実例ですね（まだたたみ終えてませんが）。

えー、あと一冊で終わる（といいな）予定です。

タイトルは『緑の鈴を、振る』……緑の章最終刊は絶対これにしようと最初から決めてました。だから、次回発売の本が違うタイトルでしたら、「のびたな」と笑ってやってください。

大変なことになっているウォルセンとナルレイシアも、早く再会させないと――神宝翠唱子が半分に分かれたままですから。

近況ですが、嘘みたいな本当の話のネタ満載だった前回に比べ、本当になにもありません

……強いて言うなら猫の額菜園のキュウリと茄子とトマトが大豊作だということぐらいでしょうか。汗だくになって水やりをした甲斐がありました。秋にはなにを植えようかと、今から算段しております。

クリスマスローズは、今のところ元気です。頑張って夏越しさせたいところです。そして今年の冬はダブルの花も買いたいと思ってます。

今回もイラストの明咲トウルさまを始め、関係各所の方々に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

次も天支本編です。緑の章最終巻になるよう、頑張りますのでどうかお待ちください。

それでは、またお会いできることを願って――。

平成二十年　夏

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101―8050
東京都千代田区一ツ橋2―5―10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
緑玉の枷に繋がれ

COBALT-SERIES

2008年9月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　礒田憲治
発行所　株式会社集英社

〒101−8050
東京都千代田区一ツ橋2−5−10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2008　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601204-1 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子

〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル





天を支える者

天を支える者2

天を支える者3

天を支える者4

天を支える者 古戀唄

天を支える者 古戀唄2

天を支える者 古戀唄3

天を支える者 古戀唄4

天を支える者 古戀唄5

天を支える者 罠は、蜜の味

天を支える者 緑風に誘われ

天を支える者 緑の糸をたどって

天を支える者 緑蘿の檻に囚われ

〈好評発売中〉 コバルト文庫

二度はないと誓った、この愛が痛い。

前田珠子 〈空の呪縛〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

空の呪縛

『針の森』に住む美しい女柱神フィオルシェーナは、恋の誘いを頑なに断り続けていた。それは、過去の過ちを繰り返さないため…。恋獄の楔に絡めとられた女神の愛の物語！



柱神フィオルシェーナの前に、かつての恋人の生まれ変わり、ファナルシーズが現れた。運命が、二人をあざ笑う。

空の呪縛

月の堕ちるとき

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。
前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ
イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者
聖石の使徒
其は力を放つ者
聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
揺籃の瞳
聖石の使徒
蒼の組木箱
聖石の使徒
狩人の爪





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魎暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魎暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魎暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

〈好評発売中〉 コバルト文庫

今なら、ママの気持ちがわかる…。

ヴィクトリアン・ローズ・テーラー

恋のドレスと約束の手紙

青木祐子

イラスト／あき



手紙に想いを綴るクリスとシャーロック。新しい依頼人シリルはクリスに悪意があるようだが、母リンダの事を知っているらしく…？

―〈ヴィクトリアン・ローズ・テーラー〉シリーズ・好評既刊―

恋のドレスとつぼみの淑女
恋のドレスは開幕のベルを鳴らして
恋のドレスと薔薇のデビュタント
カントリー・ハウスは恋のドレスで
恋のドレスは明日への切符
恋のドレスと硝子のドールハウス
恋のドレスと運命の輪
あなたに眠る花の香
恋のドレスと大いなる賭け
恋のドレスと秘密の鏡
恋のドレスと黄昏に見る夢
窓の向こうは夏の色

〈好評発売中〉 コバルト文庫

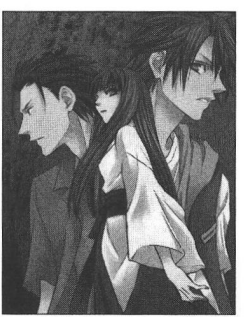
それは、時を越えた死の呪い。

1/2のヒーロー

大疫癘（だいえきれい）の巻

七穂美也子

イラスト／片山　愁



死の呪いを体内に封じた少女が、聖（ひじり）を訪ねてきた。その呪いとは、疫病の蔓延を恐れる人々に滅ぼされたある村の怨念だというが…？

〈1/2のヒーロー〉シリーズ・好評既刊

1/2のヒーロー
1/2のヒーロー 土蜘蛛の巻
1/2のヒーロー 鵺の巻
1/2のヒーロー 竜神の巻
1/2のヒーロー 大百足の巻
1/2のヒーロー 九尾の巻
1/2のヒーロー 玄武の巻
1/2のヒーロー 泰山府君の巻

〈好評発売中〉 コバルト文庫

私はあなたを愛してはいけないの？

旋風天戯（せんぷうてんぎ）

～始まりの地へ～

瀬川貴次

イラスト／明治キメラ



資産家殺しの罪を着せられ、追われる身となった芦笙（ルーシェン）たち。松樹（ソンジュ）がいる寺院に向かう途中、貴琅（グイラン）を迎えに来た燕国の使者が現れて…？

〈旋風天戯〉シリーズ・好評既刊

旋風天戯
～出逢ってはいけないふたり～

旋風天戯
～悪夢は秘（ひそ）かにやってくる～

旋風天戯
～はかない想い～

旋風天戯
～宿命と血と呪いと～

〈好評発売中〉 コバルト文庫

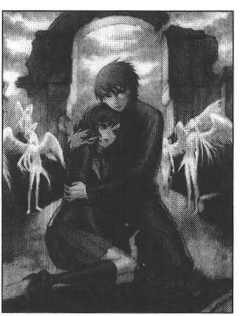
その恋が、少年を強くする——。

アンゲルゼ

ひびわれた世界と少年の恋

須賀しのぶ

イラスト／駒田　絹



秋も深まり訓練が続く中、陽菜はある変化に気付いた。それは天使病患者の宿命ともいえる症状で…？　陽菜の苦悩に、覚野が動く！

〈アンゲルゼ〉シリーズ・好評既刊

アンゲルゼ　孵らぬ者たちの箱庭

アンゲルゼ　最後の夏

〈好評発売中〉 コバルト文庫

私が知りたいのは、本当のあなた。

誘惑されたガーディアン・プリンセス

花衣沙久羅
イラスト／早瀬あきら



ジェラルド・ムーアが摂政皇太子（プリンス・リージェント）の暗殺計画に関わりがあると知ったヴィヴィアン。ガーディアン・プリンセスの姿で追跡するが…？

――〈ガーディアン・プリンセス〉シリーズ・好評既刊――

ガーディアン・プリンセス
盗まれたガーディアン・プリンセス
求婚されたガーディアン・プリンセス
恋におちたガーディアン・プリンセス

〈好評発売中〉 コバルト文庫

姫参謀の初仕事は王太子の恋人整理!?

アルワンドの月の姫

薔薇が届ける恋心

ながと帰葉

イラスト／赤羽しき



王太子シャルフの「お試し」参謀となったアルナ姫。だが、押しつけられたのは女性問題の後しまつで!?　アラビアン・ラブコメディ！

〈アルワンドの月の姫〉シリーズ・好評既刊

アルワンドの月の姫
砂漠の王子と銀の杖

〈好評発売中〉 コバルト文庫

姫君教育と、真夏の夜の悪夢!?

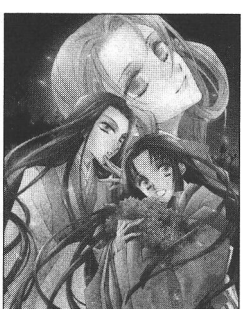
平安ロマンティック・ミステリー

嘘つきは姫君のはじまり

見習い姫の災難

松田志乃ぶ

イラスト／四位広猫



身代わりの姫君となった宮子は、毎日の姫君教育に悲鳴の連続。そんな折、〝桐壺の更衣〟という女性と面会することになって…!?

―〈平安ロマンティック・ミステリー　嘘つきは姫君のはじまり〉シリーズ・好評既刊―

平安ロマンティック・ミステリー

嘘つきは姫君のはじまり

ひみつの乳姉妹（ちきょうだい）

〈好評発売中〉 コバルト文庫

領主さまと執事が王都でデート!?

ピクテ・シェンカの不思議な森

ひねくれ執事と隠者の契約

足塚　鰯
イラスト／池上紗京



魔法の契約書を作り直すため、領主のムイは材料集めに東奔西走。だけど最大の難関は、ツンデレ執事との王都買い物デートで…!?

—〈ピクテ・シェンカの不思議な森〉シリーズ・好評既刊—

ピクテ・シェンカの不思議な森
はじまりは黒馬車に乗って

ピクテ・シェンカの不思議な森
王都の夜と婚約者

コバルト文庫

大人気コミック
『キャットストリート』を完全小説化(ノベライズ)!!
大好評発売中!!

あの場所には、
知らなかった時間と
あたしの大切な仲間たちがいた…。

キャットストリート

楽園からの旅立ち

エル・リストンに通い始め、
仲間もできた恵都。
しかし、恵都(ケイト)のトラウマ
の原因・奈子(なこ)が現れて!?



シリーズ既刊・好評発売中!

キャットストリート

ある事情でひきこもり生活を続ける恵都。ある日、フリースクールの存在を知り?



下川香苗 原作 神尾葉子

コバルト文庫　雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作　正賞の楯と副賞100万円（税込）

佳作入選作　正賞の楯と副賞50万円（税込）

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚～105枚。
【しめきり】毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女、年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』1月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10　（株）集英社　コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**（読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚～350枚。
【しめきり】毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女、年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』9月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10　（株）集英社　コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt（2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売）をごらんください。

9784086012041

ISBN978-4-08-601204-1

C0193 ¥438E

1920193004380

定価 本体438円＋税



コバルト文庫